～怪文書〇ー１５７事件～　負の連鎖反応・・・・　（ルーチカ先生との共同作品）

シー（やっぱりウザイのでシー様の様を外してみた元シー様）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～怪文書○ー１５７事件～　負の連鎖反応・・・・　（ルーチカ先生との共同作品）

【Ｎコード】
Ｎ２１６３Ｊ

【作者名】
シー（やっぱりウザイのでシー様の様を外してみた元シー様）

【あらすじ】
ある怪文書を巡る騒動と、その謎を追う新感覚ミステリー！
ちなみに、この怪文書は実在していてネット上で死の噂が既に広まっている。

作者の語り

１２月１３日
男１１歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１２月２０日
男１１歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１２月２７日
男１１歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月７日
男１３歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月８日
女１３歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月８日
男１３歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月８日
女１２歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月８日
男１１歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月９日
男１１歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月１０日
男１１歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月１５日
男１４歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月１５日
男１４歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月１６日
男１４歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月１６日
男１４歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月１６日
女１１歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月１６日
女１５歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月１７日
女１０歳死亡。死因：重度の呼吸困難

１月１７日
女１０歳死亡。死因：重度の呼吸困難

立てず続けに起こった、この自然死に疑問持たれた方は察しの通りです。

これは、病気等、事故ではなく、何がしかの力が働いて起きた犯罪
なのです。
その犯罪に利用されたあろう凶器が以下の文字となる。

ーーーーーーーーーーーーー
死死死死死死死死死死死死死死死死
苦痛死死死死死シ死死絶死死無死死
亡死死死死悲シシシ夜死死死血死刺死
燃死死死死シシシシッ死死死死シ死死死

血が流れてめぐる。
クルクル回る。
心臓がなる。
のどの音。
脳が溶けて。
呼吸の音がリズムを崩す。
目が動く。
足が動く。
手が走る。
リズムが終わる。
消えていく。
柔らかなメロディーは音を変え、激しく燃えて
静かに終えた。

４４４４４４４４４４４４４４４４４
１３１３１３１３１３１３１３１３１３
１３１３１３１３１３１３１３１３１３

彼岸花に口づけを。
黒赤のバラに思いを乗せる。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

上記の文字は、一見何のへんてつもない怪文書であるが被害者は皆、一様に、この怪文書を見ていたのです。

呪いの手紙・・・呪いのビデオ・・・

世の中に呪いがあると真剣に信じる人は、居ないであろうが、今日は、その呪いを真剣に信じたであろう人々を紹介する。

また、その人々が、どういう運命を辿るのか・・・是非ともご覧頂きたい。

負の連鎖始まり・・・

「私が皆を殺してしまったのか？　いや、違う！　きっと、この文章のせいに違いない！」

そう言って、僕に相談をしてきた友人は、愚痴をこぼしました。

彼が言うには、この怪文書を見せた人達が全員死んでしまったのだそうだ。

彼は、この怪文書を偶然道端で拾って学校へ持って行った。

そして彼は、いつもの様に、いじめられるのだが、その際、イジメグループに、その怪文書奪われたらしい。

そして、それからしばらくして、イジメグループ全員が、死を遂げたそうだ。

彼は、この現象が呪いの力で、怪文書を見せたせいだと信じきっていた。

僕は彼の言葉を信用した訳じゃないけれど、彼を落ち着かせる為にも、この怪文書を預かることにした。

・　・　・　・　・　・

彼の言葉は真実であった。

僕は、この怪文書の呪いにある一つ仮説を立ててみて検証してみたのだ。。

その仮説は、虐られている人間の手から、虐めている人間へと渡ると呪いが発動するというものだ。

その実験の為に、クラスで虐められていたA君に事情を説明して、この怪文書を渡してみた。

そうして僕の仮説の正しさは証明された。

そして、僕はある一つの疑問が浮かんだ。

この怪文書は、パソコン等でプリントアウトした活字であった。

いわば、オリジナルのデータが何処かに存在してるということである。

2次データであるプリントアウトした紙媒体が人に作用するという事なら、

この文章をテキストデータとして新たに入力してプリントアウトした物でも呪いが通用する可能性があることを示していた。

そしてそれは、今しがた証明された。

僕が実験に使った方法は、この怪文章をネットに公開することであった。

内容は呪いが作用するとの旨を書き、同じくイジメで苦しむ同士の為にネットに皆で広めてイジメの無い平和世界ににしようというものであった。

そして、しばらくして起こった。

最初は少しづつで、事件は小さくしか取り上げられなかったけど、数百人が一夜にして同時に死んでしまうという事件が報道されたのだ。

この呪い現象は社会的な話題をさらった。

この怪文書を受け取ることを恐れた少年、少女達は、次第にイジメをすることを止めていくのだった・・・

そんなある日、僕に一本の電話が入った。

「君が最初にネットで呪いの文章を流した犯人だろ・・・」

負の連鎖始まり・・・（後書き）

この時点で物語の真実を募集します。
推理して当ててみて下さい。

恐らく「ひぐらしの鳴く頃」の正解率１％の様に超難問となります。
問題が解けた人は、どうぞ振るって？　僕にメールでもしてくださいｗ

～修正～
正解率は５～１０％位になるかと思う。
常識的に考えていけば思ったより簡単かも？

ちなみに怪文書見て「怖い」ではなく「笑った」という人は、どのくらい存在するのだろうか？
僕は滅茶笑ったのですが皆は、どうですか？

電話の主

「君が最初にネットで呪いの文章を流した犯人だろ・・・」

僕は困惑した。なぜ、知っている？
この事を知ってる者は僕以外誰も居ない筈だ。
一体、どういう事なのか、電話の主は一体・・・
警戒しながらも僕は、恐る恐る問いかける。

「呪いをかけたのは、実は、この俺なんだよ」

電話の主の言い分は、つまりこういう事らしい。
自分には呪いの力があり、幾らでも簡単に人を殺せる魔法を持っているという。
最初に広く怪文書を流したのが僕である事も魔法を使って特定したという。
信じがたい話だ。
でも、もし、これが本当なら、一体、彼は、僕に何が目的なのだろうか。

さりげなく聞いてみた。

「殺されたくなければ、お金払え！」

とか言われたらオレオレ詐欺みたいなものなのだろうな。
事件にかこつけて、手当たり次第に電話を掛けて脅すというなら十分ありえる。
でも、彼の要求は全く違った。

「他にも力があるのだけど、見てみたくないか？」

どういう事だろう。見る？　全く意味が判らない。

「困惑している様だな。何、簡単な事さ、俺は理解者が欲しいんだ。自分の力を認めてくれて仲間になってくれる同士が・・・」

『孤独』なぜか、その言葉が少し頭を過ぎった。
だけど、その時の僕は、その事を深く考える事はできなかった。
なぜなら、彼は、僕の直ぐ目の前に来ていたからだ。

チャイム音に気付いたときには、彼は既に玄関越しに立っていたんだ。

「少しだけ、お話しよう」

彼の不気味そうな声に僕は恐怖した。
何かが変。違和感がある。
恐怖で僕が玄関を開ける筈がないからこそ、犯人がここに来ている理由が判らないからだ。

けれど怯えた僕が居るのも事実で、ただただ、声を殺して、部屋に誰も居ないように振舞っていた。

すると奴は淡々と話し出した。

「別に、怖がらせるつもりはないんだ。俺は友達が欲しいんだよ。俺は子供の頃から、人を殺して周りを不幸にして忌み嫌われる存在だった。今でこそ、力は制御できるが、本当の友人は誰一人として居ないんだ。　でも、やっぱり人に本当に自分を偽って生きるのが嫌で、だからこそ、こうして理解者を求めいるんだ」

奴の言葉は確かに、的を得ている気がする。
けど、今の僕にとって、何をどう決断するのも奴の恐怖に支配されていて、できない。
逃げるのも恐怖。出会うのも恐怖。
誰が僕を助けてくれ。

「大丈夫だ。俺は、これで直ぐに帰るから。安心して。君が拒むなら2度と来ない。

今日、ここに来たのは友人に成りたいと言う意を証として示す為なんだ。

これを玄関口のポストに投函しておく。俺からのプレゼントだから、どうか受け取って欲しい

君が俺を求めるなら俺は必ず君を助ける存在になると思う。

では、さようなら。驚かして御免なさい」

奴、もとい犯人の足音が聞こえる。
アパートの階段を下りる音が聞こえ、徐々にその音は遠くなる。
けれど、しばらく僕は恐怖で身動き一つも取れないでいた。
恐怖は去り、動ける様になったときには、数十分程経ち、先程まで
大降りだった雨も止んでいた・・・

電話の主（後書き）

オレオレ詐欺について妄想する描写が、余りにもムードを下げてる気がする！

一年ぶりの更新か・・・

続きが全く思いつかないから放置してたのだけど、一年ぶりに読み返したら幸運にも閃いてしまった。

でも、また、どこかで詰まりそうな気がする（笑）

プレゼント

僕もとい浦辺宮尾は窮地に立たされている。

奴が置いて行ったであろうプレゼントの中身に、どう対処して良いのかないのである。

机の上で頭をガンガン叩き付けて血まみれってる様な気分だ。

プレゼントとはＡ４サイズの紙でプリントアウトしたもので以下の様な字の羅列が書いてある。

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああ

ああ

いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

ヴェオヴェオヴェオヴェヴェヴェヴェヴェェェェェおぇぇぇぇえ・・・。

うぐっ・・・うあぁあぁぁウ”ァァァァァア

卯ｙ日宇ｆ日亜ｄｓｊｆ；ｌｋｄｓｊｆｋｌｄじゃｓｋｆｌｊン（「｜，」）ｂｋｊｆんぢお；うｓじふぉｊｋんｖｋｊんｖｋｊｆｄ」ｋｌ；ｊだｓｆｋｊｆｌｋｊｌｋ（「｜，」）ｂ無ぃｄｇぴぅあｓｄｈｊ塩言う日宇ｈｌ時おじ置こうｋｌｍｊｋｚｍゕｊ沿いｆだ尾ｓｊふぃ於ｄｓｊふぃｗｊｍンｌンｌｋｚ塩ｐｆ自訴ｈ地ｑ９Ｓ字ｓｋｊｚｖｋｌｍｚｘ度ｋじゃｄ沿いｊｇｓｌｋｍンｄｘｍｖｌｋｚｍ、。アモイが憂いｌｋｚｘｋｌｍｘ（●ー、ωー）ｂ　ＺＯ！ｊｚぉインｒｋｊィ卯ひうｚｘ９板ｓｄｆｌ；ｄさｋｆｌだｓｊｆｌ；ｋｄｓｆｋだｓｆｊｄｓｋｆｊｄｓｋｆｄｓｋｊｋｆンｖｌｋｄｆンｖｍｃｘｖ。、阿蘇ｌ＠じぇｑだｆンｈｍｌだｆン所ｈｒンだｋｇｌ路＠岩手県一関市ｙじゃｄｌｖなｌｄグじゃｓｍｋｌｄじ

ょいあｓんｇｋｄｓのくぃｄｓじょいえとｗｈｇんｋｌんｇｆｈｓ

この上記の文面を見ていると、吐き気がしそうな気分になぜかなった。嗚咽を漏らした。
気持ち悪いというか、漠然とした不安が僕の中に流れ込んで来たかの様な感じである。

この文面が何を示すか判らないが裏側に何やら使用方法と注意書きなる文面がある事に気付いた。

＜使用方法と注意書き＞
殺したい相手に、この文面、又は文字化したデータ、写真に収めた映像を１秒以上見せるだけでいい。
そうすれば見た人は数日以内に死ぬ。
でも、浦辺宮尾さんだけは大丈夫。
呪いが掛からない様にプログラムをしておいた。
使用回数は１回です。殺せるのは一人までです。
一度、使うと効力を発揮しなくなります。
もし、また人を殺したいと思う事があれば、いつでも協力致します。
その時は、先ほどの電話番号宛にご連絡ください。
＜説明おわり＞

僕はこれをどうすれば良いのか判らない。
奴の恐怖が僕を支配している。
けれど好奇心もまた僕に存在していた。

試したい。
だけど、それは無理なこと。
人殺しなんて無理・・・

・・・そんな事ははない！

死んでも構わないクズが世の中に一杯居るはずだ。
虐めだってそうだ。
結果的に沢山、人が死んでしまったけれど、救われた者が居る筈なんだ。
不幸を得た者も居ただろうが、それは過去に過ぎない。
今から良い方向に持っていけば良いだけである。
だとすれば、オレは殺るべきではないのだろうか・・・・

彼がオレを信じたという事は――――

彼は自分の力を有効活用したいと思っているに違いない。

彼の様な力を必要としてる人たちをオレが救えばいい。

彼の奇跡をこの世界で埋もれさせる方が問題だ！

だから俺は――――

浦辺宮尾と桑原和夫

浦辺宮尾は人を殺した。街中をくまなく歩けば危ない奴の一人や2人見つかる。
まず、最初に殺したのはヤクザである。
人として論外と思う者を優先的に殺していった。
そして、それは次第にエスカレートしていく・・・・。

彼は中学校の教師だった。
正義感に溢れるのが災いし、また、人を殺すのに熱中し、次第に日々の教師という職務が怠慢化してゆく。
それにより彼は関係者から怠慢教師と罵られ、次第にあるべき場所を失っていった。
そして彼は次第に自分の努力が理解されない苦しみから逃げる様に教師を辞めた。
彼にとっては、人殺しが人生の生きがいになってしまったのだ。
彼は孤独に耐えられなくなり、ついに友人『桑原和夫』と会う決断をしたのであった。

彼は今、駅のホームにて桑原和夫と待ち合わせしている。
桑原和夫は仲良くなれば、心理的共感により、もっと深いプログラムを施せるのだそうだ。具体的には、声を発するだけで人が殺せる様な、あるいは音声テープを人に見せるだで殺せるのだそうだ。
また、不特定多数ではなく、悪人のみが死ねる様な事も可能だと、浦辺を説き伏せていた。

彼は今、孤独が開放される嬉しさと、新たな正義の遂行を期待して桑原を待っている・・・

そして、その後、
事件は大きく発展して動いた。
時間が立つほどに死人が増えていき、メディアそれを大きく騒いだ。
ヤクザ、不良、全ての悪が謎の奇怪な音や文字を見るだけで死んでしまうのである。
もはや、このパニックは止まらない。
いや、むしろ人々は喜びと安堵に満ちていよう。
街中で危ない人を見れば、もう直ぐ死ぬのだと笑い。
怪文章や音声を無理やりに聞かせようと迫ったりと、強者と弱者の立場が完全に反転したといえる。

しかし、それは束の間でしかなかった。

科学者や学問に携わる者達は、この非科学的現象にどうしても納得が行かないのである。独自的な調査を始めた。警察動いた。
その頃、ネット上の噂ではとある超能力者のチームが話題になっていた。

内容は同士が増えると更に力を発揮し、念じるだけで、悪人が善人の人格に変換されてしまう等、明らかに非現実的なものである。
しかし、その噂を流した本人はやはり、桑原達であり、堂々とサイト運営をしているのであった。
同士を集い人を選別し、人々から寄付金を集めていたのである。

このチームは神から選ばれし者の集団として、そのまま直訳してないけど神達と呼ばれた。そして世の中の注目浴びた。

それに対応するかの様に彼らに対して、何者かの武装した覆面の集団が彼らの自宅を制圧し誘拐した。

大きな車に揺られ、彼らが向かう先は、一体・・・

誘拐者の正体

桑原達は、後ろ手に縛られ、眠ってる。睡眠ガスで眠らされたのである。
車は長い時間揺られ揺られ、大きな研究施設へと運び込まれた。

桑原らを誘拐したのは科学者である。探究心豊富なチームに誘拐されて、人体実験をされる羽目になった。
超能力者が現実に居るとなれば、世界的にはゆゆしき事態。
実験して究明したなければいけない。
また、覆面チームは幾度と無く、超能力解明に取り合って貰う為に、彼らにコンタクトを取っていた。
そして数少ない安全な実験に協力して貰ってた。それで十分満足した筈だった。
いくら調べても人と違う何かが見つからなかったのだから、諦めようじゃないか。
しかし、それでは一部の者は満足がいかないのであった。
不意打ちで攻め、神達を眠らせ、少し危険な解剖とか脳内細胞の抽出とか始めたのである。
眠った桑原達に、脳に変なのが今、まさに突き刺さろうとしていた。

触らぬ神に祟り無し

人体実験は、一通り終わった。
桑原達は眠らされている間に、自宅へと返された。
自分の身に何が起きたのか、想像を巡らすとゾッとした。
犯人達は、どんな奴らなのか大体は判っていたが、関わるのはもう怖い。
殺してやりたい憎悪が、つい頭を過ぎった。

そして科学者達は、数日後に死んでしまった。
直接、顔を見た訳では無い科学者までもが・・・
彼の念は強く、誘拐に関わった者達、全てが死んでしまったのである。

その科学者の死に際して捜査に加わった警官は友人達についこぼした。
「あまりの残虐な死に方に俺は一生忘れる事は無いだろう・・・」

警察も政府も、神達の存在を完全に黙認している。
まあ、いろいろ都合が良いのだろうね。犯罪が無い方が仕事が楽だし、おまんま食えるし・・・

絶対的な力と平和

しばらく世界に平和が続いていた。そんな、ある日、急展開が起きた

悪魔組織崇拝組織が現れた。
その名は不明。悪は名も無きを方がカッコいいのだ。
目的は唯一つ、神らを殺す事。

神らが念じるだけで世界中の悪が消滅される力を手に入れるのを恐れて、神達を遠くから狙撃して殺そうとした。

流石に2度目の不意打ちな無いだろうと、主人公は思ってたよね。

解剖事件以降、不測の事態に対応する為に引っ越したし、ＳＰとか雇ってたし、安心してた。
でも、今回は、ちょっとやばい。
桑原の気付かない遠くから、狙撃するつもりだ。
敵の存在に気付けないならば、いくら力があろうと無理だ。
しかし、悪の武装組織が桑原にライフフルの引き金を引こうとしたその瞬間。
何やら声が聞こえた。
「～げぇえ！　～ええ！　～げえぇ！」
聞き取れない耳鳴り様な声が、空の彼方から聞こえる。

その声に一瞬耳を傾けた狙撃手は、バタと意識を飛ぶように、魂が抜けたかの如く倒れた。。
それに気付いた仲間達はパニックした。桑原の力に恐怖している。
「～げぇえ！　～ええ！　～げえぇ！」
という謎の奇怪な音は、彼らも聞こえている。

その音の恐怖し、おののきながら桑原のマンション周辺に待機していた武装組織全てが魂を抜けたかのの様にその場に倒れ込んだ。

桑原に更なる奇跡の力が舞い降りた瞬間だった・・・

本当の神

～げぇえ！　～ええ！　～げぇえ！

何処からとも無くする音の元凶は雲の上にて居る。
その名はネルネル神。
彼は下界を見下ろしてた。

(≧∇≦)
「すげー！ｗｗ　超能力だって～～！ｗｗｗｗｗ　僕、人間で使える奴見るの始めてだよ～～！　エロネスも見て見て！」

「なんだよ、めんどいな～、どれどれ・・・って、お前馬鹿か？
トリックがあるじゃねえか！

「え？　どこどこ？

「知るか！　自分で考えろ！　メンドクサイ！

「え～～～～！　つ　め　た　い～～～～～～～

「なよなよするんじゃねえ！

(－．－；)
ネルネル神は少し、しょぼんとした。でも立ち直りが早い。
ε＝（ノ。ー。）ノ
「ヒントだけでも頂戴！」

「あ～もう、煩さいな！　最初から巻き戻して見てれば判るよ。

「え？　そうなの？　てか、巻き戻しってどうやるの？

「あ～猛面毒性名！　このXXXXXXXXXXXXを使うんだ。
ここをこうしてああして・・・

「あ、ありがとう（^―^；）
エロネスって結構、世話好きなのかな

「あ、そうそう、巻き戻しついでに悲しい話の展開にプログラム化しといたからな。俺人が悲しむ姿が大好きだからさ、つい無意識的に過去を変えちまったw

（エロネス・・・君とは長い付き合いだけど、いまいち性格わからん・・・

「あ！？　なんか言ったか？？？

「いや別に・・・何でもない」
（地獄耳だ！）

プレゼント　パターン臆病者

以下、プレゼントの項の中盤まで同文とする。

＜使用法と注意＞
殺したい相手に、この文面、又は文字化したデータ、写真に収めた映像を1秒以上見せるだけでいい。
そうすれば見た人は数日以内に死ぬ。
でも、浦辺宮尾さんだけは大丈夫。
呪いが掛からない様にプログラムをしておいた。
使用回数は1回です。殺せるのは一人までです。
一度、使うと効力を発揮しなくなります。
もし、また人を殺したいと思う事があれば、いつでも協力致します。
その時は、先ほどの電話番号宛にご連絡ください。
＜説明おわり＞

僕はこれをどうすればば良いのか判らない。
奴の恐怖が僕を支配している。
けれど好奇心もまた僕に存在していた。
試したい。
だけど、それは無理なこと。
人殺しなんて無理・・・

＜ここから新たな展開＞

人殺しなんて無理・・・

僕は、この怪しい文章を使用したくない。

なぜなら、怖いからである。
もし、本当に人が死んでしまえば取り返しが付かない。
試したい気もあるが、なによりも、奴と関われば死んでしまう気がする。。
捨ててしまいたい。
でも、それだと誰かが拾うかもしれない。
かといって破るのも何かの呪いが発動しそうで怖い。
奴の声が耳元に響いてる様で忘れらない。

僕は、この怪文章を土に埋めると決めた。
誰にも見つからない様に１０時間程走った山中の木の下に埋めた。
恐らく、もう場所も覚えてない。

だけど、駄目だった。
この世に殺したい程憎い者が現れるなんて、この時は思ってなかったんだ。
全てを忘れてしまった後、僕は自分の過ちに気付かされたんだ。

その事に気付くまで僕は。中学の教師を日々坦々こなす平凡な人間、浦辺宮尾を演じていただけに過ぎないのだと今更ながらが思う・・・

浦辺宮尾と・・・

浦辺には藤沢千佳という気がかりな生徒が居る。なにか特別大きな問題を抱えた生徒ではないとは感じつつも気にしている。

彼女は、やや不登校気味な所があり、その事で親御さん宅に何度も訪問するのであるが、直接的な原因が全くわからない。何処にでもある平凡と言える平凡、一見、家庭に問題は無い。

クラスでも、虐めがあるという訳でもなく、むしろ虐めを憎み戦う様なリーダー的存在といえ人気もある。

しいて疑問があるならば、人気がありすぎるという事。女子だけでなく、男子に人気があり、むしろ男子の方に強い人気があると言っていい。

他の教師からは心配しすぎだと諭されるのが、当然の状況である。

にも関わらず、浦辺が藤沢千佳を気にしてしまうのは当然の事で、彼女の腕にリストバンドが巻かれているからである。

学校に居る間、彼女のそれを監視していたが、一度もそのリストバンドが外される事は無かったのである。

浦辺にとってリストバンドは過去の嫌な思い出、自殺を連想させるものなのだ。

リストカット。彼がそれをしていたのは小学5年生の頃、藤沢とは状況は違うが、集団的な虐めを受けていた。暴力、泥棒、パシリ、明らかに人権を侵害する様なものばかりであったのにも関わらず、浦辺は誰にもそのことを相談できないでいた。

周囲の人間は気付いていた。

彼も虐めにたいして、周囲の人間が気付いているというのを気付いていた。見てみぬ振りをされてるのも知っていた。

浦辺にとっては、それが酷く孤独だった。

誰にも助けてもらえない自分は、存在価値の無い人間だと思い込み、生きてる意味そのものが判らなくなったのである。浦辺は、その孤独感に耐え切れなくなり、彼は自ら生きるのを止めようと決意した。

親に相談、あるいは誰かに相談できる筈。それは浦辺も理解していた。

しかし、彼のプライドがそれを許さなかった。

人に明かすという事は自分が苛められる様な人間であると認めてしまう事と彼は感じていた。苛めの事実を認める事は、彼にとって世の中に負けを認める事と同じなのであった。

けれど人は簡単に死ねるものでもない。リストカットの一回や2回では死ねなかった。やればやるほど、死を恐怖し、生きている事の小さな幸せを確認できるからだ。

そうして浦辺は、親にも誰も相談せず、リストバンドを付けたまた学生時代を過ごていた。

そんなある日、偶然、となりの席の女子に言われたのだ。

「もしかして、リストカットとかしてない？」

その言葉に浦辺は槍が刺さった様に気持ちになった。

どうしていいか判らず。ただ、その場にいる事が苦痛で逃げだしたい気持ちでいた。

そんな浦辺の気持ちを知ってか知らずか、その隣の女子は涙を流していた。

その女子の名前を里田都という。

里田都は過去、自殺未遂を繰り返していた経験があり、浦辺の異変に気付く事ができたのである。

彼女が流す涙の意味を浦辺は当初理解できなかった。同情、情け、哀れみ。どうして、他人の事で泣けてしまうのか彼には判らなかった。

しかし、話す内に彼女の経験を聞き、次第に自分に仲間が居たと思える様になっていった。
いつも自分一人で孤独と戦っていた浦辺は、同じように戦って苦悩した者が居る事を自覚したとき「自分ひとりだけじゃない」という思いになれた。
いつの間にか彼は彼女の前だけでは、全てをさらけ出せる様になり、いつの間にかリストカット止める様になっていた。
浦辺にって里田と一緒にいる空間が安らぎの居場所となり、自分自身の価値を見下そうとする癖を安定させる事ができたのだ。

そんな訳で、浦辺は今、藤沢千佳について気にしていた。
もし、自分と同じなら相当辛いはず。原因はこの際、後から調べるとして、無理やりにでもリストバンドを取り確認しなければいけない。
人目を気にするだろうから、学校の裏に呼び出して、無理やり腕を調べた。
しかし、リストカットの後は存在し無かった。
考えすぎだったのだろうが、藤沢はとても驚いている。疑問が一杯。
浦辺はなぜ、この様なことをしたかを藤沢に説明した後、両者とも安堵するのであった。
藤沢千佳にとってリストバンドは唯のお洒落の一貫であり、学校を休んでいたのは、ＸＸＸＸで体調を崩していたからだ。
それプラス、体育の授業がとにかく嫌で、そして短い授業しかない登校日や雨が降る日は学校行くのが面倒でズル休みをするのだそうだ。今は雨の振る露の時期だったから、浦辺にとっては「あ、そうか！」と納得できる理由だった。
浦辺は、その日、やっとこさ心地よい眠りに入ったのである・・・

その、深夜朝方の３時頃、
彼の自宅にて一本の電話が鳴る。
受話器を取った彼は、無言で電話である事に恐怖した、誰からの電話かと思考を巡らすと奴の存在を思い出してしまう。。
たった１０秒の無言電話だった。。
けれど、それだけで、彼は、また、いいようの無い不安に苛まれ、しばらく眠れない日々となるのだった・・・

監視者

怪文章による虐めた者の死は未だに続いていた。。
だが皆が死を警戒したのか虐めのピークを過ぎて、もう、滅多なことでは死人は現れないでいる。

そんな世界で今日も浦辺宮尾は職務を全うしていた。
その彼を全面的にサポートする妻、都。
日々の生活に追われ、奴の存在を忘れ、浦辺家に平穏な日々が取り戻されつつあった。
そんなある日、この浦辺家を何者かが監視している。
ばれない様に、まるで殺意を持ったかの様な目つき、双眼鏡で部屋の中を覗いている。
都の裸とか宮尾のフルチンとか、夜ナベで「ミヤ君、ミヤちゃん」と呼び合い、激しくなると短縮し、みゃーみゃー鳴き声を出す。
そんな一面までもが監視されていた。
その監視は学校に居ても変わらないのである。

そんなある日、彼の自宅宛に一本のＤＶＤが届いた。
ＤＶＤの中身、そこには妻、都と藤沢千佳が両手両足を縛られていた。
酷く殴られた様な後があり、元気がない。２人は誘拐さたのだ。
そこに覆面をつけた男が現れた。
男は言う
「お前は覚えてないだろうがな、俺は小学３年の時にお前に苛められた者だ。覚えてるか？　どうせ覚えてないだろう。　あの時、お前に殴られた恨みを俺は一日足りとも忘れた事は無いぜ、あの痛さ、信じられないくらいの苦痛。　まあいい、そんなのはこれからする苦痛とは比べ物にならない筈だからな。　俺は、お前の大切な者た

ちをボコボコにして殺す。　楽しいな～ｗ　だからな。お前は、ここで見ておけ。と、残念。これはあくまで俺の予告なんだよな～。殺すのはもうちょっと後だ。お前がこれを見た後に、恐怖と苦痛で歪む化顔を是非、見てみたいのだよ。だからさ、ちっちゃい希望に縋りついて、あがいてくれたまえｗｗ　殺す具体的な光景は後にＤＶＤでまた贈るからよ！　ではではｗｗ」

映像はそこで終わった。映像の中で都と藤沢は時折、命乞いして叫び、犯人の暴行を受けていた。

浦辺は、苦境の表情している。
どうにかせねば成らないが、どうしていいか判らない。
警察に連絡したところで、時間がもう無いのかもしれない。

浦辺は苦しみの中で思い出した。犯人の言葉を思い出した。
小さな希望に縋りつけ足掻け。
その奴の顔の恐怖と声の恐怖が脳内にフラッシュバックし、過去の映像を脳裏に呼び覚ます。
奴が玄関口で語りかけた恐怖を思い出した後、そして彼は携帯を取った。助かる望みを賭けて・・・

大丈夫

犯人は今、都と藤沢に語りかけている。
ナイフを持ち、動脈にあてがう。
恐怖におののく2人

「二人とも、かわいいな～～～、やっぱ殺す前にヤルでしょう。
うあわわって凄い泣いている～ｗｗ　いいね、その絵いいね～～ｗ
　早速、ＡＶ撮影会といきますか～～～～ｗｗ　、と、その前に、
ちょっと腹ごしらえしてこーーーと！」

犯人は着替える為に別の部屋へ行き、覆面をを脱ぐ。

都と藤沢は二人だけになる。沈黙中で、藤沢が弱音を吐く。二人とも息切れ気味に

藤沢「どうしてこうなっちゃったの？　先生が昔、あの男を虐めたのが悪いだって？　ふざけんな！　どこをどうしたら殴られただけでこんな仕返しができるんだよ。　あいつおかしいよ。完全に壊れてる。　怖いよ・・・こわい・・」

都「大丈夫・・・大丈夫だから・・・

藤沢「どこが大丈夫なの・・・シャレにしか聞こえないよ・・

都「昔ねあの人（旦那宮尾）が言ってたの。大丈夫！、問題ない！。心配するな！。って一切根拠はないのだけど、それを聞くとなぜか安心して・・・

都は過去の出来事を回想をした。

都の回想と・・・

浦辺１５歳、都１５歳、２人は図書室にて一緒に受験勉強をしてた。
同じ高校に行くつもりの様子。
都が受験に際して弱音を吐いた、
「難しいな・・・やっぱり進学系の学校は私には無理かもしれない。

「大丈夫。

「それ、全然根拠ないよ。

「根拠なんて問題ない

「へ？

「重要なのは自分に出来ると思い込んで迷わないことだ。迷っていたらその時間が勿体無い。

「へ～～～
ほんわかムード

「と、偉い坊さんがテレビで言ってた。
なごやかモード

なんだかめんどくさいラブリーテンションですなーーー！！
作者、こういうシーン大嫌い！
書いてて情けなくなるわーーーーー！！

いろいろはしょってさあ、大変。とりあえず、浦辺と都に関しては、

叩き落とす！
でないツマラン！

夕方６時頃、２人は自宅に帰る。冬で外は暗いので危ないから送りろうとした。けれど、都の家は公園を抜ければあと５０メートル程度、それにトイレ行きたいから都は走って帰ると言いだし、自宅直ぐ付近で浦辺と別れる。
小走りに公園を横切ろうとしたら不良に絡まれる、携帯で浦辺にヘルプするもワン切りしかできない。
トイレに連れ込まれて、乱暴される。
しかし、この時、大丈夫、大丈夫、と根拠も無い彼の言葉を思い出していた。迷いは時間を無駄にするだけ。なにか良い方法はあるはず。考えなくちゃ。迷わないで、生きる術をさがすの！

と、自分に言い聞かせて、不良の金玉を蹴った。その隙を突いて逃げ出した。」

この体験談を聞いた藤沢千佳は、諦めない表情に変わる。
「奴が帰ってきたら、おとなしい振りして抱かれて、隙を突いて、噛む！　チャンスがあるなら、おもっきりナニを噛み千切ってやる！！それが無理でも、今は、せめて叫んで助けを求めるくらいしてやる。」

その同時刻、一方犯人は着替えを追え、財布、鍵を持ち、出かける準備が整った。
出かける身支度が整ったところで、顔が苦痛に歪む。
悶絶しながら、奇声を上げ始めた。

これには都と藤沢は、突然の犯人の奇声に、殺される身の危険を感じたのか。

放心状態。
犯人が見えないところで、ずっと奇声を撒き散らしている。
なんの為に奇声を上げるのか全く理解できない。

犯人の手は１１９番に伸びる。
だが、奇声は止まない。
だが、程なくして奇声はパッタリと止んだ。

静寂が監禁部屋を包み込む。
静かな時間がどの程度ながれただろうか、遠くから音か聞こえる。
救急車のサイレンの音が聞こえた。
救急隊が突入したとき、犯人は自らの包丁で喉を切って死んでいた。

警察も来た。
浦辺も来た。
監禁部屋にて、３人は、助かった事を喜びを噛みしめていた。

奴

浦辺はテレビでニュースを見ていた。
犯人は女二人監禁した後、自殺を遂げた。
自殺する前に奇声を上げていた事が被害者の証言で明らかにされ、
なぜ、自殺を図ったのか奇声との因果関係を追及している
その話題の中で、怪文章についての謎が引き合いに出されるが、解説者は話題には関係ない言い遮る。

浦辺は思い出した。
奴に電話を掛けて縋った自分を思い出した。
涙を流しながら神に命乞いをするかの様な彼に奴は言った。

「わかった。任せろ。俺に不可能は無い！」

熱い台詞。
正義と信念が混じる様な強い言葉。

彼は奴を友人として認定したのか、それとも情けない自分を卑下したのか判らない。
ただ、記憶の底で忘れていた、虐めをしてた自分を思い出しても、
した相手の顔が思い出せな罪を神に懺悔していた。
電話の相手が何であるにしろ彼には、あの時、絶対的な力が必要だったのである。

しかし、目の前で見た犯人の死に顔も思い出す。
間接的とはいえ、殺した相手を思い出す。
しかし、今の彼には罪悪感の片鱗すら感じていない。
犯人のしようとしたことは、仮に成功してなくても死に値する。

『性根が腐った人間は世の中に要らない』という事なのだ。

浦辺は友人に電話を掛けた。
何度もお礼を言った。
『性根が腐った人間は世の中に要らない』という感情を友人と共有し合った。

そして月日は流れ、友人とはメール等での良い相談相手となった。
仲良くなり、
そして友人と会う日が来てしまった。
共通の趣味であるゴルフで意気投合し、２人は駅のホームにて待ち合わせをし始める。

友人と対面

彼と対面した時の第一印象は、普通だった。

え？　この人が超能力で人を殺せる人間なのか？？？という感じ。

どこにでも居る人で、世代としては僕より１つ下らしい。

こちらとしては助けてもらった恩があり頭が上がらないのだけれど、フレンドリーに、みやちゃんと呼ばれると、どうにも弟が出来た様な気分である。

出合った時は、まるで初対面のようにぎこちなさがあったけれど、全てが順調だった。

何より、この人を守る限り更に強い力で守ってくれる訳で、安心感が得られてしまう。

そこでつい私はＢＬに走って、彼からのバックを受け入れてしまった。

誰かに守れらる乙女の様な気持ちは、生まれて始めて感じる快感であり、妻のそれとは次元そものが違うのである。

嗚呼～～嗚呼～～ああああああああああああああ

と、彼の頭をＢＬが一瞬過ぎったが、そのエラーについては忘れたいと思う。

友人は、人と遊んだ事があまり無いらしく、いたるところに遊びに出かけさせられた。

その都度私は彼に振り回されるのだが、子供じみた遊びも懐かしいもので、私も楽しんだ。

超能力については深くは聞けなかった。
彼はがそれを望んでいない様なだったし、人を殺せる力なら、見せる事も容易でないだろうし・・・
そんな話題は誰かに聞かれても困るだろう。

私は家族に友人を紹介した。
皆で一緒にナベパーティをした。
彼は、物凄く笑顔で、こういう楽しい団らんなパーティは人生で一度もした事が無いと言って喜んでくれた。

家族は、どうしたのだろうか。
自分の能力が原因で殺してしまったのか捨てられたのか。
いずれにせよ、私からそれは気になって聞き出せないでいた。

日常が充実していたある祝日、自宅宛に彼から小包が届いた。
中身を空けるとＤＶＤである。
ＤＶＤの中身は妻都と藤沢千佳である。
２人は監禁されて乱暴を受けている。

訳が判らない。パニックなる私。

そこに現れた覆面男は言う。

「お前は覚えてないだろうがな、俺は小学３年の時にお前に苛められた者だ。覚えてるか？　どうせ覚えてないだろう。　あの時、お前に殴られた恨みを俺は一日足りとも忘れた事は無いぜ、あの痛さ、

信じられないくらいの苦痛。　まあいい、そんなのはこれからする苦痛とは比べ物にならない筈だからな。　俺は、お前の大切な者たちをボコボコにして殺す。　楽しいな～ｗ　だからな。お前は、ここで見ておけ」

あとの時と同じＤＶＤ・・・悪戯か？

いや、違う。あれは、このあと犯人は「予告がある」と言っていた。

じゃあ、今、目の前に居る殴られてる２人は・・・

今日は、朝から都は友達との食事会で居ない。
電話をかけたが通じない。
藤沢にも電話をかけたが通じない。

男は、私の行動を見計らうかの用に、妻の携帯電話みせつけ、
裸になった妻の顔をアップで見せ始めた。
訳が判らない、今起きている事は現実か？でも、焦る私は、どうしたらいい判らない。
私に閃いたのは友人だった。
彼に連絡して、助けてもらうとした。
しかし、

「実はな～俺は超能力なんて無いのだよバーカ！　しかも俺が犯人なんだよ～～ｗ」

信じがたい言葉であるがＤＶＤの中の奴は覆面を取った。
そして乱暴を働く。
それを見る私が、絶叫していると、奴は電話越しに言った。

「お前は覚えてないだろうがな、俺は小学3年の時にお前に苛められた者だ。覚えてるか？　どうせ覚えてないだろう。　あの時、お前に殴られた恨みを俺は一日足りとも忘れた事は無いぜ、あの痛さ、信じられないくらいの苦痛。　まあいい、そんなのはこれからする苦痛とは比べ物にならない筈だからな。　俺は、お前の大切な者たちをボコボコにして殺す。　楽しいな～ｗ　だからな。お前は、ここで見ておけ」

奴は電話越しで同じ台詞を復唱した。
いや、本当はわからない。頭の中がパニックで電話の奴の声を聞いたのか、それとも映像の中の奴の言葉を思い出して私は苦痛に飲み込まれているだけなのかもしれない。

たすけて
という言葉さえ聞き取れない。
命乞いする者に容赦なく殴りつける。

それを見ている私に奴は言った。

「俺は、唯、復讐するだけじゃあ物足りないんだ。。苦難を乗り越えて互いに必要とし合う状況を作り出し、仲間同士の絆を作り出し、そこで命を奪うんだよ。その時の人間の歪んだ顔を見るのが楽しいのよ～～ｗｗ　ちなみに、あの時、自殺した奴は殺し屋で、絆を作るために利用させて貰ったのね。で、自殺に見せかけて俺が殺した。すごいだろ～
あの怪文章にしたって、お前が土に埋めずに誰かに早く見せていれば、超能力が嘘だと気付けたのになｗ　ははははははｗｗｗ
まあ、見せたら見せたら殺し屋を使ってソイツを殺すんだけどねーーーー！！ｗｗ　そうやってお前に俺に超能力があると信じ込ませて、最後はこうやって皆殺しにするんだけどねーーー！！ｗ　君は

いつか殺すけど、今じゃないよ～～～～だｗｗ　恐怖に打ちひしがれてるのを見物してから、殺すんだよ～～～～ん♪」

絆を思い出した。
それまで都と生徒の藤沢千佳と歩んできた人生、全てを思い出した。
私を孤独とリストカットの苦痛から救ってくれたあの時。
生徒に気を回して笑いで終わった瞬間。
二人が監禁から助かったときの安堵感。

だが、その光景も全て、奴の恐怖の声が私を支配していく。
奴から感じ取った恐怖全てが脳裏を過ぎる。
突然の電話、突然の訪問、監禁、そして今まで奴の言葉・・・

それを自覚させる目の前の悲惨な映像。

最後に聞こえた言葉はなんだっけな。

「お前は、完全に俺に負けた！」

この言葉聞いたとき、私に、どうなっている？
泣いている。発狂してる。命乞いしてる。

二人の死を確認した後、私はしばらく放心状態だった。
そして、あてもなく、叫んだ。
小さな家に、叫びが響く。
叫んだ。

かれるまで・・・・

でなければ、大切な人の悲鳴と死に顔を思い出す、
でなければ、犯人の凶器。声、顔を思い出してしまう
でなければ、憎悪で発狂する。

幸福が絶望に変わる・・・フラッシュバックする。
それを感じる度に、不幸しかフラッシュバックしなくなる。
その果てに光と閃光のみが私を支配し、そして涙する。

やり場のない気持ちを、どうしていいか判らない私は、ただ、天に
向かって叫ぶしかなかった。

おしまい

「やっぱり、エロネスって趣味わかんない～～～（＊′　。ω。）
何が面白いのこれ？　人が死ぬなんて当たり前の光景だし、何が良いのかサッパリだよ。

エロネス「・・・・・人間に生まれてみれば判るよ・・・

ネルネル「ふ～～～～ん・・・・
（エロネスどうしたんだろう。まるで人間みたいに涙流してる・・・。）

ネルネル「まあいいやｗｗ、僕はやっぱり面白いのが好きだなｗｗｗ　僕が過去を変えるとしたら、自分を超能力者として現れてみようかな。きっと皆ビックリするかもｗｗｗｗ

「ところで、おまえ、トリックの解明はどうしたんだ？

「え？　あっ！

「あっ！　じゃない。今のを見る限り、奴には超能力は存在してい

ない。俺が過去を変えたのは浦辺を臆病者の精神に変えただけだから。他は一切手をつけてないんだ。

「じゃあ、最初から超能力は無くて、偶然死って事？

「まあ、確かに一部は偶然死に違いないが、それはホンノ一部に過ぎない。

「どういうこと？

「もっと世界を広く見ろ。浦辺や『奴』の視点以外を見てみるんだ。

「えー、もっと具体的に・・・

「・・・・そうだよな。お前はそういう奴だよな。もういい！　お前の事は知らん！

「え～～～、なんで～～、ちょっと待ってよエロエロ～（ °∀ °；ノ）ノ

「うざ！！！

～～～～～

～～

～

おしまい（後書き）

＜超能力の真実＞
恐らく９０％以上の人が真相に気付いているのではないだろうか。
まあ、超能力の真相ついては自分で考えて下し、それがこの物語を楽しむという意味で御座います。
ヒントはもう、ありません。
どうしても知りたい人は、最初の怪文書の文面を自分で分析して探求してみてください。
きっと答えどこかにあります。
ちょっと意地悪かも。

その意地悪さに気付いた読者には正当化論が聞きたいと思うかもしれないので、その時は対応します。

補足

＜奴（桑原和夫）が監禁事件にて殺し屋を利用し自殺に見せかけて殺した手口＞

知りたく無い人は読まない方が良いです。

奴は虐めの体験による復讐演劇を殺し屋に依頼した。
都と藤沢を拉致し監禁させ、映像をＤＶＤに収め浦辺に送りつけ恐怖を煽った。
その最中に、監禁していた２人で弄ぶ演技をしていた。
依頼主である桑原も画面的なフレームから隠れて同席していた。
桑原の計画は、２人を殺す前に、とにかく恐怖心を煽るというもので、殺し屋と同意していたのである。
演技は達成され桑原は「あとは自分の好きにさせてくれ」と殺し屋

に頼み、外へ出る様に仕向けた。

殺し屋は着替え終わった後、桑原に頼まれる。
「2人を脅かすために、思いっきり苦しそうな奇声を上げてくれ。」
それを了承した殺し屋は、奇声を上げた。上げまくった。
そこを桑原が後ろ手に隠していた包丁でブスリと刺し、喋れない様にポケットに隠していたゴミ袋で殺し屋の頭から被せた。

殺し屋はパニックとともに喋れなく、暴れれる様にその場に倒れた。
その後、犯人は119番へと電話かけて部屋を後にした

尚、一回目の桑原との出会いで神達と呼ばれていたのは浦辺ではない。
浦辺は駅のホームで待ち合わせた後、この補足と同じ手口を使われて絶望を体験し、その後、殺されたのである。

補足（後書き）

ここの話は、友人と対面の項にて犯人は「殺し屋を自殺に見せかけて殺した」と言ったタイミングで、回想シーンとして使えば良い？
（映像的に）

補足2

第一回目の監禁にせよ2回目監禁にせよ桑原は浦辺を絶望に追いやった後、浦辺の自宅の2階から降りてきて、こっそり監視していた。浦辺の絶望の顔を楽しんでいる。
だが、見つかり、桑原は恐怖の余り、ピストルであっさり浦辺を殺してしまう。
桑原は浦辺を陥れる最中、ずっと押入れに隠れ潜んでいたのだ（後から付け論）

＜後書き＞
この補足2のシーンはエロネス視点から描写すれば絵としても問題ない。
例えば、おしまいの項の後で、涙を流したエロネスが、ふと、下界を覗いていて補足の世界観が見えるとか。
それを見たエロネスは、なんとなく興味を持ち、時間を巻き戻して、最初から犯人視点を見るとするならば、また、物語が続いていく。

奴の視点、主人公を殺害後・・・

超能力真相に限りなくに迫りそうなので、いやなら読まない方が良い

桑原は主人公浦辺を殺した後、世の中の人が死ぬ超能力現象に着目した。
神の名を語り寄付金を集めてみようと思い、さっそく仕事？を立ち上げた。
裏社会に精通していたから、詐欺を協力する者は探すのは簡単だった。

しかし、ある日、熱心なファン（科学者）が探偵を雇い住所を特定してきた。
うざいし、金も貰えるというので、仕方なく協力する羽目になった。
しかし、案の定、科学者は死んだ・・・様に画面では見える。
でも実際は生きている。死んだような演出をしただけ。

その演出がニュースで科学者が死んだと報道されたのだけど、それは捏造情報であり、警察も嘘の報道をしていた。

理由は、自分で考えてw

＜あとがき＞

このシーンもエロネスを利用すれば絵になる。

例

ネルネルは発狂中

ネルネル「嗚呼～～やっぱり全然判んない～～　超能力が無いなら何で科学者達や悪魔崇拝者は死んでしまったのよ？」

エロネス「悪魔崇拝者も科学者も死んでおらんわ。もっと良く下界を見てみろ。

ネルネルは（おしまい項の後）の下界を見た。

その時、悪魔崇拝者は、武装した謎の組織に回収されて、大きな民間トラックに詰め込まれ、どこかへと去って行った。

ネルネル「なんじゃこりゃw　さっぱり意味が判らん。

エロネス「・・・・、だから、起き上がってるでろ。で、何か監禁されて色々されてるだろう。これは一体、なんだと思う？

ネルネル「・・・・・・・・さっぱり

エロネス「あ、そうね、根本から君は知らないのか・・・じゃあ、

全部教えんといかんだろうが！　めんどい！　もう終わり終わり！

ネルネル「えーーーーーーーーー！！

エロネス（どうしても知りたいなら人間に生まれ変わって苦労して来い！　そうすりゃ判る！）

ネルネル「なにか、一人事言ったエロネス？

エロネス「いいや、何も・・・

（お前は地獄耳か！！！

エロネス（さっきは、つい人間になれとか思ったけれど、人間てホントにきついんだよな～）

エロネス過去の人間活動を思い出していた。戦争とか飢餓とか出世争い。

その苦痛を思い出して憂鬱になっていた。

エロネス（正直、あいつ（ネルネル）には、あの地獄だけは体験させたくないのだよな・・・）

エロネスは過去、人間を幸せにしようと努力していた。それを思い出して干渉に浸る。

でも、いくらやっても、時がたてば戦争とか飢餓とか出世争いが起こりそれに振り回された。神活動はしても意味ないと思い、でも人間を見捨てるのは罪の意識を味わう。神としても、あまり楽な事ではない、そして時間が経つ程に、罪にも慣れてしまう。だからこそ

新入りのネルネルに気を使っていた。反面、この思いを誰かに理解して欲しいという思いもある。だからつい、エロネスに意地悪して問題を与えた。でも、やっぱり真実を教えるしか方法がネルネルを納得させるしかないのだと気付く。仕方が無いので真実を教えてしまう。

＜あとがき＞
エロネスお人生の葛藤のシーンを絵にすると物語が本編から多きそれる。使えない。
また、神の世界そのものを絵にしなければならない。
でも、それだと現実的で夢が無さ過ぎる。しかも作るならコストが掛かる。
あくまで神の招待は雲の上にあるステルス的な存在である。
声だけの存在で、形はあっても少し、空間が歪んむ程度が理想的。

＜アイデア１＞神々の対話はテキストの音声のみで表現し背景は宇宙空間の外。神世界に見せる演出は地球から天にズームアップして地球から更に天にズームアップ、太陽系、銀河系を出て、宇宙の外を出る。
宇宙の外の色は白色で、黒いボールがエロネスで赤いボールがネルネルとする。
そのボールの形がスライム程度に伸縮自在動き、神の対話を表現する。

画面にはテキスト；；

無理だ！神の演出で最も最適な方法は文章だ！
どうしても絵にすると不自然な感じがする！
文字のみで想像力が駆り立てられるからこそ小説にメリットがある！

いずれにせよ
＞エロネス（正直、あいつ（ネルネル）には、あの地獄だけは体験させたくないのだよな・・・）
ここから以下の本文は映像化意識するならばカット！！

奴の視点　はじまり・・・（前書き）

＜エロネスが奴の存在を最初まで巻き戻したら・・・＞

奴の視点　はじまり・・・

桑原和夫は小学3年の頃、上級生の浦辺宮尾にシャーペンを取られた。
浦辺は珍しいシャーペン（シンが無くても書ける）に興味して、嫌だと言う桑原にしつこくして半ば強引に奪い拝借した。
桑原は親に甘やかされて育ち、全ての願いが適うのが人生として当然の生き方だったので、とても理不尽だった。
力では上級生にナワナイので憎悪した。
桑原の憎悪は小動物に向けられた。
ドラゴンボール等のアニメの暴力シーンで苦痛に歪む人の顔見て興奮していた彼にとっては、前からしたかった事であった。
そして快感を知った。

是非、人も殺したいと思うようになり、完全犯罪を目論む様になる。
身を守る為に沢山の刑事物の推理小説を読み漁り、沢山の犯罪関連の本を読み。
ついに彼は中学3年の時に幼児を殺した。万が一捕まっても未成年だから大丈夫と楽観的でいた。
自分のしでかす事に罪の意識を感じる事はなかったが、自分の存在に桑原は疑問を感じずにいられない。
あまりにも皆とは違う異質な者として自覚したとき、自分は社会に絶対に適応できないと悟った。自分の欲求を我慢するツマラナイ人生を送るなら、犯罪をしようと考えた。
両親に迷惑を掛ける可能性も考えた。
しかし、桑原は裕福で金持ちであり「親は他者と比べれば子供が逮捕されて苦労する事もないだろう」と肯定する様になる。
自分が道を外しても、それくらい受け入れてしかるべきと思った。
また両親が桑原にとって必要なかった。

裕福すぎ、欲しいものがあれば手に入り、何でも望みが適う生き方が当然として彼の中に定着していたから、己の生き方に親が口を出し制限させようとするだけで憎悪した。まるで戸塚ヨットスクールに入れられる子の様なキャラである。

彼は親に自分が人を殺す欲があるのを肯定して貰えたら、きっと喜んだに違いない。
自分以外にも殺す欲の判る人が居ると思えれば、自分が世界と比べて異分子と思える感覚も少しは軽くなったのかもしれない。
共感を両親と得られれば、親に憎悪を抱く事もなかったかもしれない。
しかし、当然、親は悪は悪として、犯罪はしてはいけないという教育をした。
また世の中の雰囲気もしてはいけないと教育させる。
テレビや新聞を読んで犯罪者を忌み嫌う存在だと態度に表れれば、その時点で桑原自身が人に打ち明けられる事は出来なくなってしまう。

ある意味で可哀想な桑原であるが、高校一年で幼児を殺した後から、衝動がエスカレートしていく。同じ町で2度犯罪は起こせないので、小動物を殺した。しかし、満足できない。自分が見たいのは人間の恐怖に怯えた歪んだ顔である。

そんな日々の中で彼が17歳時、両親が事故で死んでしまった
葬式にて彼は両親に優しくされたり、楽しい思い出を思い出して寂しくなった。
だが、それは、あくまで思い出に過ぎない。
近頃は受験勉強で指図されウザイと思っていたから、彼の感情は＋－0だった。

けれど一人っ子であった彼は財産を相続するとき、閃いた。
いくらでも殺人が可能な手段を・・・

彼は私有地として山を所有していた。
小動物を殺した後は、いつも山の底が深い沼に捨てていた。
それが今、親の目に見つからずに、堂々と利用できるのだ。
誘拐、監禁、レイプ。殺害。少しづつ、それらの回数が増えた。
車の免許を取り、ネットの出会い系を利用し、彼は財産を食いつぶしながら遊びつくした。

殺す方法を常に考え続ける中で、できれば今まで憎悪を抱いた人間を殺したいと思う様になる。
自分の生きた痕跡、証を殺す事は、まるでコレクションをするかの様な感覚に近いものであった。
沢山の者に憎悪を抱いた彼にとって、主人公に行き着く事は時間の問題であったとも言える。

彼は主人公をいかにして絶望させるかを考え、方法を閃く
方法は、世の中に広まっている怪文章の話題を利用し、己を超能力者として浦辺宮尾を騙すこと。
これが奴こと桑原和夫の生き方である。

もし、超能力の真実を彼が暴くなら・・・

彼とは本当の神、ネルネルである。

＜犯人の視点、主人公を殺害後についての項＞においてにてネルネルが「なんじゃこりゃw　さっぱり意味が判らん。
」
というセリフの際、ネルネルは真相に興味が無いので早々下界から目を逸らした。
その瞬間、読者は運悪く下界が見れなくなったのね。、
だから、「作者」という名の本当の神様が、あの時、目を逸らそうとするネルネルに無理やりに視点を下界に向けさせようと思う。

＜＞
ネルネル「嗚呼～～やっぱり全然判んない～～　超能力が無いなら何で科学者達や悪魔崇拝者は死んでしまったのよ？」

エロネス「悪魔崇拝者も科学者も死んでおらんわ。もっと良く下界を見てみろ。

ネルネルは＜おしまい項の後で＞下界を見た。
その時、悪魔崇拝者は、武装した謎の組織に回収されて、大きな民間トラックに詰め込まれ、どこかへと去って行った。
謎の組織に誘拐された悪崇拝組織を乗せた民間車は、セキュリティの硬そうな軍事施設へと入って行く。
荷台の悪崇拝者は皆、眠っている。荷台から武装した大勢の者が彼らを担ぎ出す。
悪崇拝者らが目覚めると、出入り口の無い小さな部屋に閉じ込めれ

ている。
それを監視するカメラ。それを監視する謎の組織の内の一人がスイッチを押した。
ガスが部屋に充満し、もだえ苦しみながら悪は息絶えた。
悪達は訳が判らない。命乞いしながら何がいけないのか自分の過去を振り返った。

死体は部屋から運び出され軍事施設にある償却炉にて償却された。

これを見たネルネルの感想は・・・

ネルネル「やっぱり意味が全然判らないやｗｗｗ

作者、もう知りません！
おバカな神になんて知ったこっちゃありません。

ＴＨＥ　ＥＮＤ！！

ネルネル（？？？？？？）

ネルネル「え？　なにこれ？　もしかして終わりなの？　世界の破滅なの？　いやだーーーーーー！！！！　なんか怖いーーーーーーーー！！！！　エロネス助けてーーーーーー！！！！

エロネス「・・・・まあ、もう無理なんだよ。諦めようぜ。どうせこの世界は神である作者の物なんだからさ、俺らがどうこうできる問題じゃないよ。

ネルネル「えぇえええええ！！　エロネスまで、そんな事言うの？　なんで？　どうして？　存在が消えちゃうんだよ。　怖くないの？？？

エロネス「・・・・俺はもう神とか疲れてんだよね。いっそ消えたいというか、そういう思いが昔からあったし・・・。　この機会に消えても良いかなって・・・

ネルネル「そ、そんな～～、僕は一体、どうしたらいいのだよ～～～！　だれか～～だれか助けてーーーーーーーーーーーーーー！！！！

ネルネルは思った。誰でもいい。誰でもいいから助けて欲しいと・・・

すると読者の一人が、助けてあげたいと願った。ネルネルに対して愛を与えた。

「あきらめんな！」「お前が必要だ！」と励ました。

ネルネルは嬉しかった。ネルネルは直接名指しで人から呼ばれた

事や気に掛けて貰えた事は一度も無かったから、その嬉しさは半端ではない。

なので、今日、この時を境にネルネルは人間を生まれて初めて大切に思う様になったのだった・・・

おしまい

差し替え小説　本当の神（前書き）

目次の＜本当の神＞の項目と差し替えて読んでください。

差し替え小説　本当の神

～げぇえ！　～ええ！　～げえぇ！

何処からとも無くする音の元凶は、しなびたアパートの一室から聞こえる。

音のする方向はトイレ。

そこにてオカッパ頭の女が蹲り

「～げぇえ！　～ええ！　～げえぇ！」

ゲロを吐き散らき散らしているのだ。

彼女の名前はルーチカ！

この物語を書いている作者である。

「新年早々ゲロ吐いた・・・。。（ＰＤ、ｑ。）

彼女は貧乏。貧乏であるが故に食うに困る。食うに困るから道に生えた雑草を食してしまったのだ。

そう、彼女は売れない小説家なのである。

人生をペンのみに捧げてしまった結果、今更、諦められないのである。

今まで、沢山の本を読み、勤勉に書き、それでも作家デビューできない。

なのに諦めきれないのは、頑張りすぎた為だろう。

あと、少しの努力で成功が掴めるかもしれない。

そう彼女は思ってしまうのだ。

もし、ここで諦めてしまえば、今までの小説を勉強してきた事が無駄に終わるからである。

だから彼女は、がんばるのだ。

だが、頑張るってるのは彼女だけではない。お父さんも頑張っているのだ。
実はルーチカは働かずニート化している。
夢を追いかけ過ぎて、他の事（働く事）が手に付かなくなってしまっているのだ。

だとしても、お父さんは強いです。いい年こいたニートを養う覚悟があります。
でも、借金してます。
事業が失敗し、１０００万円の借金があるのです。
だから、ルーチカは草を食べてしまったのである。

今、２人の夢は一つ。
一発逆転を狙って小説で成功する事である。

働こうよ、とか突っ込みは入れてはいけない。
親子で夢見るなんて素晴らしいではありませんか。
世の中は、そうは思わなくても、お父さんだけは、そんな風に思っているのです。

ですが、今、ルーチカ先生は、病んでる。
小説のネタに困り果てている。

今、書いている物語で、超能力の現象をどうすれば現実的なトリックにできるのか悩んでいるのである。

パパ「どうしたんだい？　ルーチカ、凄いクマだよ」

ルー「パパー！　このトリックを　どうしたらいいのか判らないの？
パパはルーチカの小説を読んでみた。

パパ「ん～～何々～～あ、わかったよ、閃いちゃったーw

ルー「マジ！？　おしえて！

パパ「いやだ

ルー「なんでー！

パパ「教えて欲しかったら、外に出て働きなさい！

ルー「うわーーーーーん

¥お父さん！　夢を追いかけるじゃなかったの？¥

パパはルーチカの頭を、なでなでする。
「泣いても働いて貰うぞ！

¥お父さん！　言ってる事とやってる事が繋がってません¥

ルーチカは泣ききまくっている、それもその筈、彼女はもう２６歳、同期の仲間達は就職し自分だけはしてないという社会的な負い目を感じずにはいられない。でも、小説は散々努力してきた。その努力が一切実っていない悲しさと悔しさ、やり場の怒りと空しさは『働く事』を考える事で、より悲しみに拍車がかかる

ルー「あたし死ぬ！！！

¥お父さん！！　これは危ないです。どうしたら、こんな極端な性格に育てられるのですか？

¥あ、なるほど、ありがとうございますm（＿＿）m

¥直ぐに答えが判りました。

ルーチカは台所に行き包丁を取り出しエイヤーーーー！！と手首を切りつけた。

ルー「あああああ、痛いな・・・　やっぱり、死ぬの怖いな～～～　アタシやっぱり死ねない！！

¥はい、一人でに立ち直りました。¥

パパ「じゃあ、ヒント教えてあげる。」

¥え？　お父さん何？　このタイミングで何でその切り替えしなの？¥

ルーチカ「やったーーーーーー！！！

¥え！？　なに？　この娘さんの軽い身のこなし・・・¥

父は娘さんの書いた小説を見て熱く語る。

「この最初の出だしが悪いと思う、ここをこうして、こうして、こうすれば・・・

娘も真剣に耳を傾けている。

「なるほど、判った！　序盤の話を書き変えればいいのね。　よし、やるぞーーー！！

ルーチカ先生は再度ペンを握り書き始めた・・・

時間は飛び、

ルー「やった！　書けたー！　パパ見て見てーー！！

パパ「どれどれ・・・

父は小説を覗き込む読んでいるページは・・・・・・

差し替え小説　本当の神（後書き）

ネルネルとエロネスでは絵的に無理があり実用化に向かないと考えた。
その時、作者であるルーチカと俺を神として代入しようという発想に至った

差し替え小説　おしまい（前書き）

この本文は『おしまい項』に差し替えて読むものである。

差し替え小説　おしまい

父は娘の書いた、この残忍な犯人が出るホラー小説を読んでいた。

父「こわいーー！こわすぎるー！

うんうん

父「なんちゅう怖い話を書くんだルーチカ！　パパちびるかと思ったよ。

うんうん

娘「え？　どこが怖いの？　これ笑える話だよ

うんうん？？？

娘「だってこれ、犯人めっちゃ楽しそうじゃん。あたしも楽しかったし～～」

父「・・・・・」

父顔真っ青、悪事をする桑原の顔をルーチカに重ね合わせて、自分を浦辺と重ね合わせて妄想してしまう。

卒倒

父倒

¥お父さん！　しっかりして下さい！　お気を確かに！！　気持ちは判りますけど、すくすくと元気に育っているではありませんか。

妥協しましょう。妥協を・・・

娘「パパ～～どうしたの？　なんで倒れてるの～～？

父は目を覚まさない。

泡を吹いてる。

その様子を娘は楽しそうに見物する。

しばらく、その泡に見とれていたら、娘は気付いた。

（あ！　アタシ、超能力トリックについてまだ、書いてないよ！
肝心な部分を書き忘れてた。　これじゃあ、何も解決されないミステリーになちゃうよ～～（汗

汗った娘は父は叩き起こした。

数回ぶちました。

頭を机の角にぶつけて、血がプシューとさせた。

父「あ、あれ??　パパは何してたんだっけ？　記憶が・・・思い出せないな・・・

娘「パパはね、さっき足をフスマとの段差にぶつけた衝撃で、バランス崩して、そこの机の角に頭ぶつけたんだよ。

父「おおーー、そうだったかーー！　どうりで血が出てる訳だ・・・

娘「大丈夫？　包帯取ってくるねw

父「あ、ありがとう。

時は経ち、
包帯がミイラの様にグルグル巻きになってる父が立っていた。

娘「ねえ、どうやったら、トリックをばらしていける展開になると思う。

父は包帯グルグルで喋れない。

娘「う～ん。パパでもわかないか～～～　しゃあない！　あとがきとか補足でネタをばらせば、いいやな。

娘は父を放置し、机に向かって執筆を再開した。

差し替え小説　補足２（前書き）

目次の『補足２』と差し替えて読んでください

差し替え小説　補足2

第一回目の監禁にせよ2回目監禁にせよ桑原は浦辺を絶望に追いやった後、浦辺の自宅の2階から降りてきて、こっそり監視していた。浦辺の絶望の顔を楽しんでいる。
だが、見つかり、桑原は恐怖の余り、ピストルであっさり浦辺を殺してしまう。
桑原は浦辺を陥れる最中、ずっと押入れに隠れ潜んでいたのだ（後から付け論）

＜後書き＞
ルーチカのパパがホラーを恐怖する顔に味をしめて、どやって怖がらそうか考えてたらアイデアが閃いて追加で補足2のシーンを書いてパパに見せるという展開
それに味をしめて、更に怖いのを書く。＜奴の視点　はじまり・・・の項＞への流れてもいい。

＝例＝
ルーチカの脳裏にパパの泡を吹いてる顔を思い出す。
ニヤニヤして、執筆を始める。補足2のシーンを映像で表現。
しおわったら、パパは小説を手にとって読んでいる。

ルー「どうどう？」
パパ「わわ、怖いなこれ！　こんなヤバイ悪人見たこと無いよ」
娘「え？　どこが怖いの？　これ笑える話だよ

娘「だってこれ、犯人めっちゃ楽しそうじゃん。あたしも楽しかったし～～」

父顔真っ青、悪事をする桑原の顔をルーチカに重ね合わせて、自分を補足2の浦辺と重ね合わせて妄想してしまう。

卒倒
父倒
泡を吹く
ルーチカは笑みを浮かべる。
笑っている。
しばらく観察している。
体のあちこちをさわり、脈を確認したり、息の量を確認したりする。
（心臓が止まってる！）
ルーチカびびる。
頭を何度も机の角にぶつける。しかし父目覚めない。

やむなくパパに心肺蘇生を施す。
口付けを吐きながら人工呼吸をする。

あせるあせる。
パニックする。
その時、思い出す。
パパと過ごした日々を・・・

でも、思い出すと、あせる。
パニックする。
その時、思い出す。
物語の主人公の言葉「大丈夫。問題ない。心配するな」

受験勉強での主人公が語った光景
「重要なのは自分に出来ると思い込んで迷わないことだ。迷っていたらその時間が勿体無い。
都が公園でレイプされそうになり、金玉を蹴った事。
藤沢千佳が監禁された際に自分に言い聞かせた言葉
「「奴が帰ってきたら、おとなしい振りして抱かれて、隙を突いて、噛む！　チャンスがあるなら、おもっきりナニを噛み千切ってやる！！それが無理でも、今は、せめて叫んで助けを求めるくらいしてやる。」
それらを思い出したルーチカは・・・

・・・小説の続きを書くべく、父を放置して机に向かった・・・

差し替え小説　補足２（後書き）

時が経ち
ルーチカは机に向かい執筆中・・・
足元付近には心臓麻痺で倒れたパパが転がっている。
執筆に集中してる。
ルーチカの筆が進む。
静まり返った部屋にペンの走る音だけが響く。
そして時折、ルーチカの顔がニヤけた。

この時を境にルーチカ先生は小説を書きまくるのであった。
作家として成功したかは定かでは無いが『迷い』が無くなったルーチカの小説はきっと面白ことだろう。
と、ネ申は思う。

怪文書〇ー１５７事件とは

物語を執筆中にてルーチカは思った。
どうして自分はタイトルが怪文書〇ー１５７事件～にしたのだろうか？
記憶を辿ってっても思い出せない。
物語に〇ー１５７を示すものは何一つない。

今更ながら困った。
既に皆は〇ー１５７として認知している訳であるし、タイトル名を変えてしまう訳にはいかない。
〇とは一体、何を意味するのだろうか。
まるまるまる。
何かを代入してマイナス１５７
超能力の真実代入してー１５７

怪文章トリック　ー　１５７＝？？？？？

１５７人の命が怪文章により死んだことにしよう。
物語上、怪文章によりそれくらい死んだのは確かだ。
例えば浦辺、都、悪魔崇拝者たち、己の父。
怪文書原因で死んだと判断された者たち・・・

そしてその死による影響は、ＸＸＸＸＸＸである。

ルーチカはペンを走らせるの止め、そして笑った。

その脇に倒れた父を放置したまま笑う。

そして、また、一心不乱に執筆を再開した・・・

ルーチカ先生の書いた小説　例えばこんなラグナロク１

＜プロローグ＞

その日は朝から雨がしとしと降っていて、その雨は私が新宿駅に下り立った夕方にも変わる事なく降り続けていた。
今日、この新宿に出向いて来たのにはある一つの目的があった為だった。
それは、仁志田山千（にしだ・さんぜん）と言う絵師に会うため。

山千は三年前に突然、画壇に現れて、無名のままに数々の賞を総舐めにしたという逸話を持つ謎の人物だ。
雑誌やＴＶでも話題になったが、一切のメディアの目に触れる事なく、今現在までその存在自体が謎とされて来た。
それが今回、偶々取材の許可が下りて私の担当となったのだった。
人伝（ひとづて）に聞いた話によると、何でも山千は取材に当たり、私を名指しで指名してきたと言う。
それが本当ならば、山千は私が知る人物か…もしくは知らぬ間に関わっていた人物と言うことになる。とは言え、今のところ私には想像もつかず、答えは彼に会ってからと言うことになるのだろう。
私は電話で指示された場所に向かって、はやる気持ちを押さえながら歩いて行った。

新宿三丁目を越え、駅前の喧騒も遠く微かな灯りとなった所。人通りも途切れたビル街の真ん中にぽつんと建つ豪舎な平屋の一軒家があった。
指示された場所は確かにこの場所を指している。

（新宿のビル街にこんな建物があったなんて――）

私は驚きに満ちながらも、何度もメモに書かれた住所と目の前の建物を見比べては狐につままれたように立派な門構えの建物に足を踏み入れていった。

重厚な扉の、そこだけがやけに近代的なインターホンを鳴らし、私は家人からの返事を静かに待った。

時間にしたら一分、いや数十秒ほどか。この屋敷の持つ何やら異様な存在感に、私は息を飲む思いで扉の前に立ち尽くした。

――藤田さんかね？

唐突に喋り出したインターホンからは意外に若い男性の声が響いて来た。

このまま時間が止まってしまうんではないかと思っていた私は、突然の事に跳び上がるほどびっくりしたが、職業柄か咳払い一つする内に冷静さを取り戻していた。

「はい。月刊画廊の『現代を斬る』担当の藤田です」

――電話で伝えた通り、一人で来たんだろうね？

「はい。仁志田先生のご指示通りに私一人でまいりました」

――よかろう。鍵は開いておる。入りなさい。

その言葉が終わると同時にインターホンのプツリと切れる音がして、私は恐る恐る黒塗りの重たい木の引き戸を開けていった。

「こちらにおいでなさい」

玄関から正面に長く延びた廊下の奥の方に障子から灯りの洩れる部屋が伺い見れる。どうやら声はそこから聞こえてくるらしい。

「あのー。鍵は――」

「掛けずとも良い。誰が来ると言うわけでも無い」

私の言葉に間髪を入れずに応える。この声の主が仁志田山千なのだろうか。

私は「お邪魔します」と言って靴を脱ぎ揃え、意外にも奥広い屋敷の薄暗い板張りの廊下を恐る恐る進んでいった。

「ここだ。お入りなさい」

丁度、灯りのともる部屋の前まで来た時に声の主は私に向かって言った。

玄関先といい、今といい、この家の主は何か不思議な力でも持って来訪者の私の一挙手一頭足を逐一観察しているのではないかと思われた。

「失礼します」

私は緊張を隠せずに静かに障子戸を引き開けていった。

◇

障子戸を開けた先には十五、六畳程の畳の間があり、先ほどの声の主と思われる人物がその座敷の中央に座していた。

私は部屋に上がり障子戸を閉めると部屋の中央まで進み声を掛けた。

「月刊画廊の藤田です。仁志田先生ですか？」

「……いかにも。儂が仁志田山千だ」

そう名乗った人物は見た目にもまだ若い好人物だった。

仁志田山千などと言う名前から、勝手に堅物の老人みたいなのをイメージしていた私は少し拍子抜けして、しかし凝りに凝っていた緊張から解放されたせいか思わず小さく安堵のため息を吐いた。

「お若いんですね。もっとお年を召された方をイメージしていました」

「意外だったかな？」

彼は私に座布団を勧めて、座る様にと言った。

「ええ。先生が日経杯を初め、数々の権威ある賞を取られた時には、無名とは言えそれなりのキャリアを積んだ方だろうと思い込んでましたから」

「人は見掛けによらぬものだ。ましてや絵の世界は実力の世界。紙の上に表現する感性が全てのものなのだよ」

「はい」

私は初めて会う、この仁志田山千と言う絵師が持つ不思議な魅力に少しずつ惹かれはじめていた。

「……ところで君を呼んだのには訳があってな」

私はごくりと唾を飲み込んで居住まいを正した。

忘れていた。

この謎の絵師、仁志田山千はそれこそ社内でも無名な私を名指しで呼び出したのだった。

「儂には人を見る眼がある。それは常人に備わるものとは全くの別モノでな」

山千は意味有り気ににやり、と笑った。

「以前、君を街中で見掛けた時に、君のその背にあるモノに興味を惹かれてな」

「私の背にあるもの……ですか？」

「うむ。それ以来、いつかそれを儂の絵として形に残したいと思い、悪いとは思ったが勝手に君の事を調べさせて貰ったのだよ」

「……はあ」

我ながら何とも間抜けな返事だと思ったが、山千の余りにも突拍子もない言葉に私は開けた口を閉じるのも忘れて、満足そうに話し

を続ける彼の顔をまじまじと見つめた。

「取材の代わりと言ってはなんだが、君の絵を描かせて頂きたい」

「え？　あ、はい。私なんかがモデルで良いのでしたら……」

「そうか、頼まれてくれるか」

山千は満足気に頷くと、棚の中から大きい和紙の様なものを取り出し、畳の上に拡げはじめた。

「いま直ぐに、ですか？」

「都合が悪いかね？」

「いえ、その様な事はないんですが……」

私はそう答えたものの、動揺を隠せないでいた。

それほどに仁志田山千の異様とも言える目付きに戸惑いを感じていたのだ。

「君はそこで楽にしていればいい。ただ、私が筆を持つ間は話し掛けるのは控えて頂こう」

そう言うと山千は硯に落とした墨に筆を浸し、紙に筆を下ろした。

そうして書き始めると静かなこの屋敷の中、もう私の耳には私自身の呼吸と山千の荒い筆使いの音のみが響くだけとなった。

声を掛けるなと言われても、もう筆を持った山千に声を掛ける様な隙など無い。山千の取材に来たのに、思えば頭から彼のペースに

呑まれっぱなしだ。
口を封じられてしまった私は、仕方なくこの機会に改めてこの部屋を眺め回した。

向かって正面、山千が背にする上座の壁には大きな掛軸が掛っている。
その掛軸の独特な絵柄は山千自ら描いたものだろうか。三つの頭を持つ龍の様な体の怪物画だ。黒墨を使い力強く描き出されたその想像上の生き物は、見ている私を何故かとても不安な気持ちにさせた。

「アジ・ダハーカだ」

私の視線に気付いたのか、山千が筆を動かしながら言った。

「力と再生の象徴。私の力の源でもある」

「力の象徴……」

私は思わず呟き、その水墨画を見つめた。

三首の龍はそれぞれ鋭い牙を持った口を閉じたり開いたりしてはいるが、その眼孔だけは依然として見ている者をねめつける様に睨み付けている。
手には中国の古い絵画に出てくる様な宝玉などは持たないが、その爪は鋭く、触れる者を引き裂くには十分過ぎる程だ。
背には鱗の様なものがあるが、見つめ続ける内に鱗と言うよりは模様…何か象形文字の様にも見える。
私は何か言い知れぬ恐怖を感じて龍の絵から目を反らした。

山千を見れば、黙々と筆を動かしている。
時折、私に視線を向けるが、それは私を見ていると言うより私を透かしてその奥を見つめる様な、そんな感じに取られる。
その実、山千の描く絵は私に似ても似つかない。
半裸に近い女性が舞を舞う様な絵。頭の回りには後光さえある。
天女…？　何だろう。
私には分かりかねた。

◇

それからどれ位の時間が過ぎただろうか。
一心不乱に筆を奮う仁志田山千を前にして明ら様に腕時計を覗き込むのも気が退ける。かといってハンドバッグに入っている鳴りもしない携帯電話を開く訳にもいかず、時を知る術を奪われた私にはそれがたった数分の事か、もしくは数時間にも及ぶ事なのか計ることは出来ない。
しかしそれは、決して長いと言う様なものでもなく、或いは永遠にも感じる一瞬の出来事だったのかも知れない。

「……アナーヒター」

今まで黙々と筆を奮っていた山千が唐突に筆を止めて呟いた。
山千の視線の先には彼の描き出した女性が優雅に、また力強く舞っている姿がある。

それは明らかに私をモデルとしているのだが、しかし描かれた人物は私に似ても似つかない程に皇后しく、美しい。
黒墨で描かれたにも関わらず、金銀のきらびやかささえ伺い取れるみたいな頭飾と小さな四角い箱に星々を散りばめた様な美しい耳飾り。肌に薄い衣を腰に高く巻いた帯でまとめ上げている。

そして、その顔には全てを抱擁するかの様な慈愛の笑みが湛えられていた。

たった今まで描いていた絵の上に手にした筆を無造作に投げ出すと、山千は立ち上がり今までとは手の平を返した様な態度で私を冷ややかに睨み付けた。

「……申し訳ないが、今日のところはこれでお帰り願おう」

「えっ？」

余りにも突然の事に驚く私をその場に残して山千は背を向け、部屋を出ていこうとする。

「ちょ、ちょっと待って下さい！　まだ取材も……」

「私の事は何なりと好きに書いて下さって結構」

「でも、」

慌て戸惑う私にギロリと矢のように鋭い視線を投げつけると、「君とはいずれまた近い内に会う事になろう」と言って部屋から去って行った。

一人残された私はしばらく無言のまま山千が消えて行った障子戸を見つめていたが、このまま居てもしょうがないと思い、山千の屋敷からお暇する事にした。

座っていた座布団から立ち上がり、帰りかけて、ふと私をモデルとした山千の絵を見下ろした。

山千が投げ出した筆が美しい異国風の女性の首筋にまるで血を流

したような痕を筆先から滴り落ちる黒墨によって形作っていた。

『アナーヒター……』

山千が態度を変えるに至った絵と口から溢れた謎の言葉。

私はその言葉を繰り返し頭の中で呟きながら、仁志田山千の屋敷を後にした。

◇

あの日から仁志田山千の姿はぷつりと消え、画壇からもその噂を聞くことが無くなった。不思議なことに新宿にあったあの屋敷さえもが跡形もなく消え失せていた。

そして、それから数年後に私は奇妙な事件に巻き込まれることになるのだった――。

＜決戦！＞

◆

「くそっ！　限りがない」

群がる黒衣の集団を手にした木刀で打ち据えながら夜の山道を駆け登る。若者が打ち捨てた者たちは地面に倒れた傍からぐずぐずと土くれに変わった。

「ちょっとは手加減してくれよっ！」

若者が空に向かって吠えた。視線の先、その頭の上を一匹の仔豚がプカプカと宙に浮かんでいる。その背にはコウモリの様な黒い翼が生え、山頂を目指して走る泣き面の若者に向かって容赦ない言葉を投げた。

「馬鹿者。鍛えてくれと言ったのはお前じゃないか、アユム」

その仔豚の悪魔――ラルルカス・メゾフィール・ド・ラクシュは小さく円らな瞳をキラキラと光らせながら、暗闇の中で真っ赤な視線を歩に向けた。

「せっかく俺様が先読みの力を与えてやったんだ。それを上手く使いこなせるようになるこった」

「ハァハァ――わかってるけど、こんなに数が多くちゃ――わっ！」

悪魔の魔法により生み出された土人形が二体、両脇から歩の胴目がけて体当たりをかます。避け損ねた歩が地面に投げ出された。すかさず土人形たちがわらわらと群がり、倒れた歩の上に折り重なる。

「ぐわあ！」

仔豚姿の悪魔ラルルカスは小さな可愛らしい頭をフリフリと振りながら、呆れ顔でため息を吐いた。

「残念だったな、アユム。ゴールまで残り三百メートルってとこだ」

「……くそー」

ぐずぐずと土くれに戻った土人形たちの下から這い出した歩は、体中の土を払い落しながら悔しそうに山頂に視線を向けた。

「まだリアルタイムと先読みの情報とが混線しとるみたいだな」

「分かっていても、走りながらだと咄嗟に動けないんだよ」歩が口を尖らせた。

「そんなことはない。身体は脳が考えているよりも遥かに高性能な器なんだ。脳から伝わる電気信号は弾丸よりも早い。傍で音がしたり、何かを投げつけられたりすれば思わず目蓋を閉じたりするだろう？

その反応が出来るのなら、目蓋を閉じる前に弾丸を避けることも可能だ。

脳の処理速度を高めるのとリアルタイムと先読みの画像を切り離して判断出来るようにすることだ」

「……無茶言うなぁ」

歩はぶつぶつと不満を溢しながら、山頂に向かって歩き出した。その前を黒い翼を羽ばたかせて仔豚が飛んでいる。

去年の夏に買った雑誌の付録にあった恋い占い。そのＰＣサイトのアドレスに跳んでみるとパソコン画面一杯に魔方陣が現れた。そこから飛び出して来たのが仔豚の姿をした悪魔ラルルカスだった。

ラルルカスは悪魔の序列でいうと２５６番目。魔界での爵位は男爵で、魔界に帰るとハンサムで女悪魔にモテモテなんだそうだ。その言葉を歩は未だに信じていない。

「お前の脳に植えたユグドラシルの種子は魔界にある親樹から力を吸い上げ、苗床であるお前に力を与えている。魔力とは本来全ての生き物が持つ生命の源で、ユグドラシルの種子は寄生する代わりに苗床であるお前の存在能力を引き立たせている。だがそれは万能の力ではない。お前自身が力の使い方を学ばなければならないのだぞ」

「分かってるって。そんなに何度も、耳にタコだよ」

「ふん。分かってるように思えんから何度も言ってるんだ馬鹿者が！」

ラルルカスが歩の頭の上をクルクルと飛び回った。この仔豚の悪魔が怒ったときにやる癖だ。歩はうんざりしながらも、このふざけた姿の悪魔の助言なくしては何れ起きるであろう生き残りを賭けたゲームに勝てないことも理解していた。

◆

魔方陣から飛び出した悪魔ラルルカスは変わった悪魔だった。自分自身を菜食主義の美食家と評した。

「俺様は人間の魂なんて下衆なモノは喰わないんだ。俺様が喰うのは生命樹の実。それも若木に生える甘酸っぱいヤツに限る」

パソコン画面から飛び出し歩の部屋に現れた仔豚姿の悪魔はそう言って歩に契約を持ちかけた。

歩はその悪魔の契約を受け入れ、ユグドラシルの種子を頭に植え込まれた。

それ以来、悪魔ラルルカスは歩に付きまとい、魔界の奥底に生えるというユグドラシルの種子が芽吹くのを待っている。

◇

「それにしても、あの雑誌の付録に付いてたアドレスの魔方陣、一体誰が何の為にやった物なんだろ？」

山頂の山小屋に戻り、風呂の用意をしながら、歩はもう幾度となく呟いた言葉を口の端に乗せた。ラルルカスは何処からか採ってきた木の実を噛りながら、歩の言葉を聞き流した。それも何度となく彼らの間で議論された話題で、ラルルカスが現れた日以来、あのアドレスにアクセスしても魔方陣どころかホームページそのものが消えていた。雑誌社に問い合わせてみても、付録の記事を書いた記者が退社してしまった為に確認が取れないとのことだった。

「低能な悪魔であれば大した考えもなく目の前の贄に飛び付き、満足すればそのまま魔界へ引き返すだろうな。現に契約が成立しなければ、力ある悪魔であっても長くはこの世界に留まれない」

契約を交わした夜にラルルカスが言った言葉だ。
その翌日は各局のニュース番組は日本全国で一斉に起きた「謎の死」について報じた。死者の数はその日確認された数だけで２００人を越えていた。

「大して有名でない悪魔や人間に名前を忘れられちまった悪魔、名前も知られない下級の妖魔なんかはそうそう人間界に来るチャンスは無いからな。扉が開けば喜び勇んで飛び込んで来るぜ。奴らは大抵、人間の魂が好物だからな」

「そうでない者もいるんだろ？　例えばラルルカスみたいにさ」

「ハハッ！　俺様みたいに高尚な嗜好を持つ悪魔はそうそういないだろうぜ」

「じゃあ、もしかして、あの魔方陣から悪魔を出して生き残ったのは僕だけ？」

「……さあ、それはどうだか。何匹かは俺様みたいな力ある悪魔がこっちにやって来たかも知れん。悪魔は位が高くなればなるだけ、人間との契約を引き延ばし愉しもうとするからな」

「そうなの？」

「ああ。俺様には全くは興味ないが、上位の悪魔の中には憎悪とか悲しみとかって人間の特定の感情を好んで喰う奴らがいるからな。なるべく優位に契約を取り交わし、自分が好む人間の感情を高ぶらせようとするのさ」

「感情を食べられたら、その人はどうなるの？」

「もちろん、死ぬ。結局は魂を喰うってワケだからな。特定の感情に染まった魂を、さ」

「へー」

ラルルカスの言葉にその時の歩はホッとしたように気の抜けた返事を返した。

「あの事件から何ヵ月も経つけど、それ以降、特に変だって事件は起こってないんだよなー。一体、何が目的だったんだろな、ラルルカス？」

「……さあな」

ラルルカスが食事の手を止めて振り返り、伍衛門風呂に火を入れながら半分独り言のように呟いている歩を眺めた。

（くくく……アユムめ。自分には関係ないとでも思っているのだろうが、魔界の種子がお前の魂を吸い上げて育つとは知らずに呑気なことだ）

ラルルカスはテーブルの上の木の実を口に喰わえ、中断していた食事を再開しながらほくそ笑んだ。

◇

歩がこの二週間の間、利用して籠もっている山小屋は塩原家が所

有する山に建てられた物で、猟の解禁日には猟を趣味とする近くの村人が利用したりする。だが、一年のその時期だけでそれ以外での利用はごく稀だ。歩は田舎に帰省して来た際に祖父に頼んでしばらくの間貸してもらうことになっていた。

「蒔き風呂はいいねえ。こういうとこじゃないと味わえないからな」

「ずいぶん呑気だな。与えられた時間は存外少ないのかも知れないぞ」

ラルルカスが食事を終えてテーブルの上でくつろぎながら歩に可愛らしい顔を向け声を掛けた。

「どういうこと？」

歩がドラム缶の風呂釜の中から顔を出して湯船で今日一日の汗を流しながら返事を返した。

「何かがここへ近づいて来るってことだ」

ラルルカスは横たえていたテーブルの上から体を起こし、赤い瞳を光らせて辺りの様子を伺うように何者かの気配を探った。

「……ふむ。どうやらご同僚のお出ましらしい。アユム、そろそろ風呂からあがって服を着た方がいいぞ」

「な、なんだって！？」

ラルルカスの言葉を聞いて歩は伍衛門風呂から飛び出し、濡れた身体をタオルで拭くのもそこそこ慌てて服を身に付けた。

◇

「……来たぞ」

ラルルカスが歩の傍へと飛んできた。歩は山小屋の唯一の出入口である扉の方に向かって大きく息を吐き身構えた。

木製の扉を叩くノックの音が三回鳴り、程なく扉がわずかに軋みながら外側に向かって開いた。

「……お邪魔してよろしいかしら？」

甘く艶っぽい声が夜風に乗り、山小屋の奥に陣取る歩の耳元まで届いた。思わずゴクリと唾を飲み込む歩。扉の向こうからゆっくりと人影が室内へと踏み出し、徐々に天井に吊られたランプの光に晒された。

◆

テーブルの向こう正面の椅子に腰掛けた女性は河野夜兎と名乗った。長い黒髪を後ろで一つにまとめ、体にぴったりとした真っ白なTシャツに薄いシースルーのカーディガンを纏っている。すらりの伸びる脚には膝の擦り切れたブラックジーンズを履き、赤いブーツが足元でテカテカと主張している。

化粧気はないが健康的な肌と愛らしい口元。彼女のキラキラと光る大きな瞳が歩を真っ直ぐに見据えている。普段から家族以外の女性に慣れていない歩はこの予想だにしなかったシチュエーションにどぎまぎとしていた。

「お前ら、一体何しに来やがった？」

歩たちとは違った緊張感を醸し出している二匹がいた。それは歩に憑いた仔豚姿の悪魔ラルルカスと謎の美少女・夜兎の肩先に浮かぶ米粒のように小さな小蝿――の悪魔だった。

「まさか山で迷子になったとかって言うんじゃないだろな？」

「ハハハ。まさかまさか。俺様のように有能高貴な悪魔になると全ての“迷い”なんて事柄から無縁になるものさ」

ブンブンと目まぐるしく中空を飛び回る小蝿をラルルカスは忌々しげに睨み付けた。二匹のやり取りを可笑しそうに口元に笑みを浮かべて見つめる謎の美少女・夜兎に向かって歩が躊躇いがちに声を掛けた。

「あの、ホントに何しにいらしたんですか？　ここは僕の爺ちゃんが管理してる山小屋で、別に何も珍しい物もないんですけど」

悪魔たちのやり取りから夜兎が脚を組み換えて歩の方に視線を向けた。

「……ほんのちょっぴり挨拶に来たの。それだけ」

「挨拶ですか」

「ええ。これから始まるゲームの対戦相手がどんな子なのか拝みにね」

夜兎は意味ありげな視線を投げ掛けニンマリと妖艶に微笑った。

その表情は少女と言うには余りにも艶っぽく大人びたものだ。
歩は同じ年くらいの少女を前にして完全に飲まれてしまっていた。
「アユム、お前、敵になるかも知れん奴を前にして気後れしすぎだ」
ラルルカスが歩の耳元で囁いた。歩は上気した顔を左右に振って気持ちを落ち着かせようと目の前の少女から視線を反らした。
「けけっ。何ビビってんだぁ？　戦う前から怖じ気づいたか？　それとも夜兎の色香に惑わされたか？」
「ライス、家主に対して失礼でしょ。私たちはゲストなのよ」
「大したもてなしもされてないんだが」
「いいから、正装に直りなさい」
「ちっ。姫様のお言い付けには従うしかないのが従者の悲しい運命さね……」
テーブルの上をうるさく飛び回っていた小蝿が羽音を消し、急に静かになったと思った瞬間に少女の隣から紫煙が立ち、中から白衣の男が姿を現せた。
「あまりの美男子で驚いているんだろ？」白衣の男は手に持った蛇をパイプのように口の端に喰わえ歯を剥いて嗤った。「魔界の貴公子ライス様だ。医者でもあるからな、ライス先生と呼ばれることもあるが……まあ、それは若い女に限らせてもらうかな」
悪魔ライスが傍へと腰掛けた女主人である夜兎へとあからさまな

目配せをしたが、当の夜兎はうんざりとした顔をあさっての方に向けていた。

◆

「貴方が歩くんね」

「藤田さんですか」

「ええ」

待ち合わせのカフェでテーブルを挟んで向かい合い、注文したコーヒーが届く前に歩たちは簡単な挨拶を交した。歩は差し出された名刺を受け取り、藤田忍と書かれた名前の横にあるフリーライターという肩書きと本人を見比べた。

女性は清潔感を漂わせる出で立ちで、若い女性にありがちな必要以上に肌を露出するでもなく、オフィス街に見られるキャリアウーマンといった風にグレーのパンツスーツを無難に着こなし、薄紫色のスカーフを首に巻いていた。年の頃は二十七、八といったところか。ガラス窓から差し込む陽の光に茶色に染めた髪が明るく輝いている。落ち着いた雰囲気の女性だった。美人ではあったが、異性を興奮させるような妖艶さとは程遠い、傍にいて安心させるような、そんな自然な空気を纏っている。

「あの、単刀直入に訊きますけど、」

注文したコーヒーがテーブルに付くのを待ってから歩は切り出した。

「貴方があの雑誌の占い記事を書いたんですよね？」

フリーライター藤田忍は手元のコーヒーに口を付けてからカップをテーブルの上の皿に戻し、ゆっくりと視線を歩に向けた。

「そうよ」

「何故、あんなことを？」

「アエーシュマに対抗する為の勢力を集める為に」

「あの時、ずいぶん人が死んだとニュースで聞きました」

「そうでしょうね」

「良心が痛んだりしませんでしたか？」

「もちろん、痛んだわ。けれどこれから起こることに比べれば些細な事」

「……」

「それに貴方のような戦士が獲られるなら、犠牲になった人たちも報われるはずよ」

「……僕は戦士なんかじゃない」

「誰も望んで戦士なんかになったりはしないわ」

忍の話す言葉の意味を掴みかねて歩が怪訝に眉をひそめたと同時に、その直ぐ肩先に姿を消していた筈の仔豚姿の悪魔ラルルカスが飛び出し、奇声を上げた。

「アエーシュマって……まさか！」

ラルルカスが興奮し、動揺したように叫ぶ。その様子に驚き、歩は慌てて周囲を見渡した。カフェの中は先ほどと変わらず静かな賑わいを見せている。どうやら悪魔の声と姿は他の人間の目には映っていないようだ。

歩はホッと胸を撫で下ろし、改めて二人に向き直り先ほどの言葉の意味を訊ねた。

「何だい、それ？」

「アフラ・マズダーを最高神とする私たちの神々に敵対する悪神のひとり。貴方たち悪魔が言うところのアスモダイ」

忍が微笑み、歩の傍に浮かぶラルルカスに視線を向けた。ラルルカスはその名前を聞いて一層顔色を変えた。

歩は訳が分からず、肩先を落ち着きなく飛ぶラルルカスに向かってしつこく説明を求めた。やがて少し落ち着いてきたラルルカスが――それでもまだ普段以上に黒い翼をバタつかせながら――話し始めた。

「アスモダイ……アスモデウス……ソロモン72柱の序列32番目の大悪魔。魔界の東方を治める色欲の魔神だ」ラルルカスは話している最中、突然ぶるぶると震え出した。

「冗談じゃない！　俺みたいな小悪魔が適う相手じゃねーぜ！」

ラルルカスは騒ぎ、一段と激しく黒い翼をバタつかせた。藤田忍は僅かに口の端を上げ、興奮気味に喚く悪魔の姿を少しばかり可笑しそうな様子で眺めた。

「大体、てめえは一体何者なんだ！？　ただのフリーライターだ、オカルト好きだなんてことはあるまい！」

ラルルカスがその様子に気付き忍に向かって苛々と噛み付いた。

「フリーライターであることには間違いないのだけど……」そう言ってから忍はニッコリと微笑み、低いが力強い声で語った。

「私自身はただの女よ。ただ、水と豊穣を司る女神アナーヒターを守護神に持っている」

◇

「既に敵の勢力は固まりつつある。過去には私の許に敵の急先鋒であるアジ・ダハーカが接触してきたわ。その時は様子見で終わったけれど」忍はその時のことを思い出したのか苦々しく顔をしかめた。

「今度の戦に於いてはこちら側が後手に回ってしまったと言わざるを得ない。事態は急を要しているの」

「だからといって、何で俺たちが！　そっちの神族のゴタゴタだろうが！」

「まだ解ってないようね。今度の戦はヴァン神族を始め、私たち中東の神々、また散漫なオリュンポスの神々でさえもが世界の覇権を競って争うことになる。言わばこれは神々の代理戦争なのよ」

「何だと？　そんな話は聞いてな――」

「多くの悪魔たちはまだこの事に気付かずにいる。そして貴方たちの魔界でいち早く事態に気付き、動き出したのがアスモダイ。その他の大悪魔たちは、あのルシファーでさえ未だ傍観を決め込んでるわ。彼はかつて天界でも天使の主座を勤めた程だし、魔界を治める王の一人で最高軍師でもある。彼からすればまだ戦局を見計らっているって段階かもしれないけど」

「それで、僕たちにどうしろと？」興奮するラルルカスを横目に歩が訊ねた。

「単刀直入に言えば、私たちの仲間になって欲しい」

「断れば？」

そう言ってラルルカスが牙を剥いた。歩は緊張して女神アナーヒターの加護を持つという藤田という女性を見つめた。

「……直ぐにどうこうって事はないわ。直に戦の開始を知らせる鐘が鳴る。世界を魔法の力で覆って眠らせ、人間たちの世界を傷付けないようにしてから、ゲームはそれからだわ」彼女は嗤った。ここへきて初めて正面に座るこの女性から得体の知れぬ力を感じ、歩はゴクリと唾を飲み込んだ。

◇

時期が来たら連絡するとの言葉を残し、フリーライター藤田忍はカフェのテーブルから伝票を取り上げ去って行った。

その去り際、蝋燭の火を消すような仕草で忍はラルルカスに向かってふっと言を吹き付けた。

「あの女……」

忍が店を後にしてからラルルカスが歩の耳元でチッと舌打ちをした。それに気付き、歩が肩先に浮かぶラルルカスに向かって声を掛けた。

「どうした？」

「俺様に言を吹き掛けやがった」

「シュ？」

「ああ。まあ、何だ、メッセージみたいなもんだ。言葉と映像を伴ったイメージの塊だな」

「で、あのひとは何て？」

「まあ、簡単に言えば“仲間になれば望みの物をやる”ってこった」

「ラルルカスの望みの物って、ユグドラシルの樹の実だろ？」

「この馬鹿！」

「へ？」

突然ラルルカスに怒鳴られて歩は訳が分からずにキョトンとした。

（もうそんな暢気なこと言ってる場合じゃなくなっちまったってーの！）

ラルルカスは心の中で毒づき、再び苛々とテーブルの上を飛び回った。

◆

それから何事もなく、半年の月日が流れた。

一年前、フリーライター藤田忍の仕込んだ占い記事のサイト。その魔方陣により召喚された超絶美形悪魔ラルルカスにより世界樹ユグドラシルの種子を植え付けられた塩原歩は親樹であるユグドラシルから魔界の力を少しずつ吸い上げ、地獄のカリスマでもある大悪魔ラルルカス・メゾフィール・ド・ラクシュの助けもあって戦士として日々成長していた――。

「誰に向かって話してんの？」

扉が開き、麦茶を手にした歩が部屋に戻って来て、ベッドの上でくつろぎながらブツブツと呟くラルルカスに向かって訊ねた。

「何だか今、超絶美形がどうのって聞こえたけど？」

歩に声を掛けられてラルルカスはベッドの上で声の方へと視線を向け、小さなピンクの尻尾を左右に振った。

「ん？　いや、読者の皆様にだな、ここまでのあらすじを分かりやすく説明してたところだ」

「は？　何、読者って？」

「……オホン。まあ、それはさて置き、そろそろあの藤田って女から連絡があってもおかしくないんじゃないか」

「そうだね」

歩はグラスの麦茶を喉に流しながら、椅子に腰掛け、勉強机に投げ出したままの夏休みの宿題の山をうんざりとした目で眺めた。

「それよりも、この夏休み中ずっとラルルカスと遊んでいたから、宿題がまったく進んでないよ」

歩がそう言ってため息を吐くのとラルルカスがベッドの上にあった枕を投げつけたのが同時だった。しかし歩は頭をわずかに振って難なくラルルカスの放った枕を躱した。

「……ちっ。アユムめ、生意気に先読みが上手くなりやがって」ラルルカスはむくれて再びベッドに寝そべった。「それもこれも全て俺様のお陰なんだぜ？　ちったあ感謝しやがれ！」

「あはは」

歩は椅子から立ち上がり、床に落ちた枕を拾ってベッドへと向かった。枕を元の位置に戻してそのままベッドに寝転ぶラルルカスの横へと腰を下ろした。

「それにしても暇だなー。こう毎日平和だと、その神々のゲームってのが何だか待ち遠しくなってくるよ」

歩の呑気な言葉にラルルカスが頭を持ち上げて怒ったような強い口調でたしなめた。

「馬鹿言うんじゃねー！　ラグナロクを単なるゲームだなんて思ってちゃいけないぜ？　神々にとっちゃ一時の覇権争い、勝敗を賭けたゲームかも知れないが、神々の代理として参加する俺たちからすれば実際に命を賭けた戦なんだぜ！？」

「う～ん。それは何度も聞いてるんだけど、いまいちピンと来ないんだよなー。大体、その、敵の姿ってのがはっきりしないし、僕にしたって誰が味方で何をすればいいのか……。それに参加するメリットってのが分からないよ」

「メリット？　デメリット？」ラルルカスが呆れたようにため息を吐いた。

「もうお前は神々のゲームに参加が決定しちまってんだ。生き残りを賭けた戦いにメリットもデメリットもあるもんか。この戦に勝っても負けても得をするのは神々だけだ」

ラルルカスはふて寝を決め込んだらしく、ベッドに顔を埋めてわざとらしい寝息を立て始めた。

歩は苦笑をもらして、左手に浮かんだ五芒星の印を見つめ、来るべき日とやらの来訪を強く待ち望んだ。

◆

「戦況はどうなってる？」

「前線は今、五百メートル程の距離を於いて、中央にあるゴルゴダの丘を挟み膠着状態にあるわ」

本陣を構えた広場の前には兵士たちがいつでも出陣出来るように将校の命令に備え待機している。一際大きなテントにはアフラ・マズダー率いる神軍の将校たちが集まり軍議を開いていた。

「アヤメは？」

一軍を任された将の一人、塩原歩は傍に立つ同じく軍師補佐官で将の一人、藤田忍に声を掛けた。

「彼女なら弓兵を連れて左翼に。敵の魔術師が操るジャガーノートの大群を相手にしてるわ」

魔術により強化された獰猛な人豹の戦士たちを思い浮かべて、歩は小さく身震いをした。

「ジャガーノート相手に弓兵だけで大丈夫？」

「彼女たちなら大丈夫。ケンタウロスたちは優れた戦士だし、何にせよ彼らを率いているアヤメにはホルスの眼がついているから」

水と豊穣の女神アナーヒターの化身である忍が安心させるように歩に顔を向け力強く頷いた。

太陽神ラーの息子ホルス。その力を授かった者には遥か千里の距離も間近に感じるという。ホルスの眼は千里眼。狙った獲物は逃がさない優れた狩人の眼。

歩はスラリと伸びた肢体にぴったりとした民族衣装を纏い、長い黒髪を頭の上で編みまとめあげた褐色の女戦士アヤメユウキの凛とした姿を思い浮かべた。

いつかアヤメの名前が日本の言葉で勇気って意味があるんだと教えたら、嬉しそうに何度も「勇気、勇気」と繰り返していた。歩はその時のアヤメの無邪気であどけない少女のような姿に一瞬見惚れてしまった。だが、そんな彼女もホルスの加護の下、この戦に神々の代理戦士の一人として参加している。この戦が終わって、無事生きて帰ることが出来たなら、心ゆくまでアヤメと二人で語り合いたいと歩はそう心に願った。

◆

味方の右翼を攻めた敵の一軍を退け、歩率いる隊は小高い丘に陣取り一時の休息に入った。

翼竜たちを空からの歩哨へと立たせ、兵たちを休ませた歩は僅かな供回りと共に前線となるゴルゴダの丘を彼方に望める場所まで来ていた。

「どうしたんだ、ラルルカス。やけに不機嫌だね？」

ラグナロクが始まり、冬の神々が人界に雪を降り積もらせた。魔力を帯びたその雪は地球上のあらゆる生命と時を止め、力なき者たちにひとときの眠りを与える。全ての生命は植物でさえもが冬の神々が降らす雪の中にと深く埋もれ、終決の日が来るその時まで静かな眠りについていた。

「ふん。いけすかねえ」

「何が？」

「この戦そのものがだ！」

ラルルカスは黒い翼を落ち着かない様子でバタバタと羽ばたかせて言った。

「今のところ戦況は切迫してるとは言え、向こうの主力部隊はまだ温存中だ。ましてやベルゼビュートにアスタロトなんて悪魔の中の大悪魔が敵勢力に付いちまうなんて、どうあったってこっちが適いっこない！」

「でもこの間、地獄を統べる三人の王のうち、ルシファーが味方に付いたんだろ？　地獄の大軍師って言われてるひとだし、敵の悪魔の中にもかなり恐れられている存在みたいだから、結構、期待出来るんじゃないか？」

「馬鹿を言うな！　これだから無知な人間は……。

あのな、ルシファーって悪魔は創造主である神に弓引き天界を追われた元天使長、堕天使だぞ。堕ちて直ぐに地獄をまとめあげて天界に戦を仕掛けた張本人だ。それが天界に組する神族が多くいるこちらの軍に素直に組するとは考えられない。そうだろ？」

「う～ん……でも、魔界の大軍師なんていうからには頭がそうとうキレるんだろうし、例えばこっちに加勢した方が有利だと見込んでの行動じゃないのかな」

「まあ、確かに」ラルルカスは飛び回るのを止めて歩が腰掛ける岩の上に降り立った。何かを考える時の癖で小さな赤い瞳をクルクルと回しながら忙しなく瞬きを繰り返した。

「この戦に勝てば敵対してる神の領地を奪えるからな。向こうが勝ってもルシファーの領地を奪い魔界の勢力はベルゼビュートとアスタロトで二分されるだけだが、もしもルシファーが勝てばベルゼビュートとアスタロトの領地が一挙に手に入るワケで……」

隣に蹲った可愛い仔豚姿の悪魔はブツブツと呟きながら、そのうちに黙って考え込んでしまった。しばらくラルルカスの様子を眺めていた歩はため息を吐いて正面に顔を向け、遥か遠方に望む最前線、ゴルゴダの丘を眺めた。

◆

アフラ・マズダー率いる神軍とアンラ・マンユ率いる魔軍は依然、ゴルゴダの丘を間に挟み睨み合いを続けていた。神軍に属する歩は水と豊穣の女神アナーヒターの力を宿した軍師補佐官の藤田忍に見初められ、敵の猛攻極める激戦の右翼を魔界一の猛者、大悪魔ラルルカスを従えて縦横無尽に駆け抜ける。奮戦のかいあり敵の軍団を一旦は退けるが、一夜明け新たな敵の出現に今また事態は窮地に追い込まれていた。押し寄せる敵兵を歩兵一個小隊を率いて何とか斬り伏せながらゴルゴダの丘に向かい進む新米の将・歩であったが、絶大なる信頼を置く腹心の麗しき瞳を持つ美形悪魔ラルルカスの奮闘により僅かずつではあったが、戦況は好転していた――。

「――って、おい！　ラルルカス！」

歩が後ろに向かって声を掛ける。返事を待つ間もなく左右から敵のトロルが突進してきた。左右交互に振り下ろされる戦斧を地面を転がり避け、立ち上がり様に敵の腹に剣を振るう。

敵の帰り血を浴びながら後ろを振り返りラルルカスに文句を言っ

た。

「こっちがこんなに働いてるってのに、ラルルカスったら何をブツクサ言ってんのさ！」

「ん？　そりゃお前、読者様に今の近況を分かりやすくだな……」

「だから何なの、読者って！？」

「読者っつーたら、読者だよ。あっ、ほら後ろ！」

ラルルカスの言葉を待たずに歩は振り返り、頭目がけて振り下ろされた戦斧を手にした剣で受け止めた。力比べを挑むトロルの隙をついてみぞおちに蹴りを入れ、突き飛ばす。すかさずトロルの柔らかい喉を目がけ剣を突き刺した。

「まったくきりがない！」

トロルが石になる前に剣を引き抜いた歩は顔に飛び散った返り血を腕で拭った。ラルルカスが黒い翼を羽ばたかせながら歩の傍へとやって来る。

「しょうがあるまい。かなり深い所まで斬り込んで来たからな。ゴルゴダの丘も直ぐ目の前だ」

「仲間の兵たちの疲労が心配だよ」

「なーに。ここまで混戦になっちまえば押すも引くも、そう違いは無いぜ。後は個々の気力の問題だろ」

突然ラルルカスが黙り込み、辺りの臭いを嗅ぐように鼻を鳴らした。

「おい、何だかきな臭いぜ……嫌な空気が漂ってやがる」

ラルルカスの言葉に歩は剣を構えて周囲を見渡す。傍にいた部下の兵士を呼びつけ、敵の強襲に備え背中合わせに四人で小さな円陣を組んだ。仲間の兵士を守護しているインプが不安気にギィギィと鳴いた。

不意に右手から巨大な影が物凄いスピードで突っ込んで来た。剣や盾を構える間もなく仲間の一人が獣の一撃で首をちぎられた。あっという間に円陣が砕ける。歩たちはすぐさまその場を跳び退き、挟み撃ちにするべく獣を囲んでいく。

獣はその巨体を包む漆黒の毛並みを炎のようにくゆらせ、蛇の尾を振りながら周りを囲む兵士たちに向かって低い唸り声を上げ、威嚇している。上顎から巨大な犬歯が二本突き出ている。その姿だけを見れば、まるで太古の昔に存在したというサーベルタイガーのようだ。だがこの獣が纏う邪気は単なる肉食獣のものとは違う。明らかに負の魔力を帯びたものだった。

「おい、アユム！　こいつはやべーぜ！　一旦引いた方がいい！」

ラルルカスが叫ぶ。だがその言葉は歩の耳に届く前に魔物の咆哮により掻き消された。

緊張が走る。魔物が一方の兵に気を取られている隙を見て背後に回った兵の一人が槍を構えて魔物に突き刺した。だがその槍は魔物の尾の一振りで叩き折られ、振り向いた魔物の鋭い前足の一撃で兵の左肩から首の上までが引き裂かれ宙に舞った。

グオオオオン！

咆哮。直ぐ傍にいた兵士が恐怖し剣を取り落とした。その兵を守護する筈のインプが半狂乱となってその場を飛び去る。
先読みの力でさえ、この魔物のスピードと力には適いそうもない。歩は魔物を前にして剣を構え立ちすくんだ。

◇

魔物が牙を剥きにじり寄る。
絶体絶命――。そう思った矢先、魔物の躰を無数の矢が貫いた。

グァァァォオオ！

矢の雨に射たれた魔物が巨躯をくねらせのた打ち回る。

「アユム！」

聞き覚えのある女性の甲高い声に歩は顔を向けた。
二頭の屈強なケンタウロスが引く戦車に跨がったアヤメが弓を携えたケンタウロス達を引き連れ丘を駆け下りて来るのが見えた。
その凛々しい姿はまるで戦場で勇敢に散った戦士のもとに現れるというヴァルキュリアのようだった。

「アユム！」

アヤメは歩の名を叫びながらも手にした弓で魔物を射る。ホルス

の眼を持つ彼女の矢は鋭く空気を引き裂き、魔物の右目を貫いた。

グオオオオオーーッ！

魔物が痛みに苦しみ身悶えながら少しずつその場から後退りしていく。

歩は傍で放心状態となっている兵を引きずって援護に駈け付けた弓隊の方へと下がった。

歩は自分の兵をアヤメの部下のケンタウロスに預け、アヤメに助けられて戦車に乗り込んだ。

「大丈夫？」

「ああ、ありがとう。助かったよ」

褐色の美少女はおよそ戦場に似付かわしくない眩しい笑顔で微笑んだ。

アヤメ率いる弓隊は魔物に向かって尚も執拗な矢の雨を降らせた。

魔物は低い呻き声を上げながら傷付いた巨躯を引きずり、樹が茂る森の方へと逃げて行った。

◇

「危ないところだった。本当にアヤメが来てくれなかったらどうなっていたか……」

「ゴルゴダの丘から後方を見下ろしたら、偶々アユムの姿が見えた

の」

そう言ってアヤメは白い歯を見せた。ホルスの眼を持つアヤメでなければ歩の姿を見つけることは出来なかっただろう。

アヤメの眩しい笑顔に歩はこの戦が始まって以来の安らぎを覚えた。戦が始まってから幾つもの死を見つめてきた筈の彼女の瞳は、戦いが始まる前と変わらず澄んでいた。

「酷いことすんねぇ」

耳元で突然、男の声がした。

歩たちはハッとして辺りを見渡したが、声ばかりでその姿は見えない。

「たった一匹を大勢で寄って集って。たくさん傷付いてキナちゃんも可哀想に」

「キナ？」

ようやく周囲を飛び回る小蝿から声がしているのだと気付き、歩は警戒しながらも言葉を返した。

「ああ、そうさ！　あの子の名前だよー。キナちゃん……可愛い名前だろ？　夜兎が付けたんだ」

そう言って小蝿は周囲をブンブンと二度ほど飛び回り、やがて皆の前から飛び去っていった。

「何、今の」

アヤメが呟く。歩は曖昧に返事を返し、肩先に浮かぶ悪魔ラルルカスへと顔を向けた。
ラルルカスは翼をバタバタと羽ばきながら落ち着きのない様子で周囲を伺っていた。

◇

「そういえば、持ち場を離れちゃって大丈夫なの？」
歩は隣に立つアヤメに声を掛けた。
「先ほど私たちの軍がゴルゴダの丘を制したの。戦はこちらに優位に進んでる。もちろん、まだ気は抜けないけど、山場は過ぎたわ」
アヤメが笑った。歩たちはアフラ・マズダー軍の旗がはためくゴルゴダの丘に向かってゆっくりと戦車を走らせた。
「あの兵士のインプがどっかへ逃げてっちゃったけど、大丈夫かな」
歩が後ろを振り返り、ケンタウロスの背に乗せられた未だ放心している兵の姿を見て、傍を飛ぶラルルカスに声を掛けた。ラルルカスは歩をチラリと振り返ると正面に顔を戻しながら面倒臭そうに呟いた。
「――ふん。どうせそこらに隠れて震えてるんだろ。一度契約を交したら契約が切れるか、どちらかが死ぬまで契約者から離れる事は出来ないんだ。ほっとけばその内に戻って来るさ」
意外に冷たく言い放つラルルカスに、悪魔にも色々な事情があるんだなと歩は心の中で苦笑を漏らした。

「そんなことより……来たぜ！」

ラルルカスが前方を睨み叫んだ。

アヤメが手を挙げて戦車を止め、兵士たちに注意を促す。歩も剣を鞘から引き抜き周囲を伺った。

◇

身構える歩たちの数メートル前を戦場に似付かわしくない呑気な様子で可愛らしい黒猫が草かげから飛び出した。

呆気にとられた歩たちの目の前で黒猫は見る見る内に美しい女の姿へと変貌した。

「お久しぶりね、アユム君。それと……仔豚ちゃん」

むせ返るような邪気を纏い、魔女・河野夜兎が艶っぽい流し目を歩たちに送った。血の色を思わせる赤い唇の端を持ち上げ、にんまりと微笑う。

夜兎は初めて逢った時と同じ膝の擦り切れたブラックジーンズに深紅のレザーブーツ。唯一違うとすればインナーの白いTシャツの上に薄手のカーディガンは無く、代わりに黒い長袖のジャケットを羽織っていた。若々しい容姿風貌とは裏腹に相変わらず年齢の読めない妖艶な空気を醸し出している。

「ギャハハハハ！　相変わらず湿気た顔してやがるな！」

耳障りな笑い声を上げて、二人の周囲を小蝿がうるさく飛び回る。

「――ライス。お客様の前では正装になさいといつも言ってるでしょ？」

「ちっ。ウチの姫さんも相変わらず作法にうるさいぜ！」

小蝿の立てる羽音が止み、夜兎の直ぐ傍で紫煙が立ち昇る。その中からいつか見たことのある白衣姿の男が現れた。

「ガハハハ！　そこの豚面の小悪魔よりもよっぽど品があるだろうが？」

魔界の貴公子を自称する悪魔ライスが笑いながら蛇の尻尾を喰わえ、パイプをふかすようにして口から煙を吐いた。その黒い煙はまるで生き物のようにクネクネと幾重にも絡み合い、蛇が鎌首をもたげるようにして空中で掻き消えた。

「貴方たち、アンラ・マンユ軍の者ね？」

アヤメが手にした弓を構えて訊ねた。アヤメの動きを見てケンタウロスたちも弓を構える。夜兎と彼女を守護する悪魔ライスはその様子にも怯むことなく不敵な笑みを向けている。

歩はゆっくりと戦車を降り、夜兎の前へと踏み出した。

肩先でラルルカスが牙を剥き低く唸っている。歩は夜兎に向き直り、無言で剣を構えた。

「ウフフ」夜兎が笑う。魔女の笑い声が戦場に響く中、白衣姿の悪魔ライスの躰が膨れ上がり、双頭の口から血の滴る巨大なおぞましい地竜の姿へと変わる。

「さあ、始めましょう。ゲームはまだこれからなのだから……」

fin.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2163j/

～怪文書○ー１５７事件～　負の連鎖反応・・・・　（ルーチカ先生との共同

2011年9月10日20時08分発行